

北地アリノ木遺跡

四国横断自動車道（伊野～須崎）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000年3月

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



北地アリノ木遺跡遠景（南上より）



遺跡全景（南西上より）



遺跡全景（上より）

序

四国四県の県庁所在地も高速道路により結ばれ、高知空港の拡張工事も始まるなど、交通網の整備が急速に進んでいます。高知県の場合、さらに県の東部、西部への道路網の延伸を行うことによって、高速道路の持つ意義がさらに大きなものとなっていくわけです。現在、南国～伊野間が開通し、さらに伊野～須崎、～窪川へと西伸しつつ、工事が進められています。同時に事前の発掘調査も順次実施され、貴重な発見が相次ぎました。それぞれの土地で、様々な歴史を知るための材料を得ています。

北地アリノ木遺跡の調査においても、幾つかの成果を得る事ができました。古代、近世の遺物の発見があり、その時代に生きた人々の生活の痕跡を目にすることができました。

発掘調査による成果は、それぞれの地域で、祖先がどのような生活をしていたかを見ることができ、そして、それを今の私たちが考え、生かすことにより、現在、未来を豊かに生きていくうえで、意味のあるものにすることができます。その土地で人はどのような生活を行っていたかを、かけがえのない文化遺産として伝えられなければいけません。発掘調査報告書により、少しでもそれらの役に立つことができ、歴史を学ぶことに対する理解と関心が一層深められればと願っています。

最後になりましたが、本発掘調査を実施するにあたり、御配慮、御協力いただきました関係各位に対しましてここに厚く御礼申し上げます。

2000年3月

財団法人 高知県文化財団 埋蔵文化財センター

所長 河崎 正幸

例 言

1. 書名

本書は、高知県文化財団埋蔵文化財センターが平成9・10年度に実施した四国横断自動車道建設に伴う北地アリノ木遺跡発掘調査の、埋蔵文化財発掘調査報告書であり、書名を『北地アリノ木遺跡』とする。

2. 遺跡の所在

北地アリノ木遺跡は、高知県土佐市北地字アリノ木他に所在する。

3. 調査期間

試掘調査は平成9年11月10日～平成10年1月9日まで、本発掘調査は平成10年5月18日～平成10年9月16日まで実施した。

4. 調査面積

平成9年度試掘調査320m²、平成10年度本発掘調査1,000m²。

5. 調査主体

発掘調査は、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。

6. 調査体制

(1) 試掘調査・本発掘調査の担当

江戸秀輝（高知県文化財団埋蔵文化財センター 主任調査員）

(2) 試掘及び本発掘の総務の担当

大原裕幸（高知県文化財団埋蔵文化財センター 主幹）

7. 本報告書の執筆と編集

執筆及び編集は江戸が行った。

8. 試掘調査、本発掘調査及び整理作業に参加した作業員の方々は、以下のとおりである。記して感謝したい。（敬称略）

試掘調査現場作業員は下記の方々である。

産田康子 滝沢昭子 徳平真也 弘田恵子 森沢健次郎

本発掘調査現場作業員は下記の方々である。

岡田晃 国沢英子 国沢数代 国沢節子 高橋初 藤岡京子 松本明美

試掘調査・本発掘調査共に重機操作は国沢工業の皆さん。

遺物整理・報告書作成に関する作業員は下記の方々である。

岩本須美子 尾崎富喜 松木富子 山本由里

9. 発掘調査及び報告書作成に際して、以下の諸氏に御協力いただいた。記して感謝したい。（敬称略）

調査・測量については、国沢清二（国沢工業）、出原恵三・松村信博（高知県文化財団埋蔵文化財センター）に協力を得た。また報告書作成にあたっては大野佳代子・出原恵三・浜田恵子・松村信博はじめ高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸氏に協力を得た。

また、調査中様々な御協力をいただいた地元の方々、諸般の御協力をいただいた関係各位に対して感謝申し上げます。

10. 資料の保管

試掘調査と本調査で出土した遺物および記録図面・写真等の資料は、高知県立埋蔵文化財センターで保管している。

凡 例

1. 報告書に用いた高度は海拔高であり、北方位については真北を用いた。
2. 遺物の図版番号は、本報告書における遺物全体について、通し番号とした。
3. 遺構図版の縮尺は、それぞれの内容に応じて設定し、個々の図面にスケールを付した。
4. 遺物図版の縮尺は、基本的に1/3とし、それぞれにスケールを付した。

本文目次

第 章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境	1
1. 地理的環境.....	1
2. 歴史的環境.....	2
第 章 調査に至る経過と調査の方法	7
1. 調査に至る経過.....	7
2. 調査の方法.....	7
第 章 調査成果	10
1. 調査区の概要.....	10
2. 試掘調査.....	10
3. 検出遺構と出土遺物.....	14
(1) 検出遺構.....	14
(2) 出土遺物.....	14
第 章 考察	24

挿図目次

図 1	遺跡位置図 1	1
図 2	遺跡位置図 2	2
図 3	北地アリノ木遺跡周辺の遺跡分布図	4
図 4	遺跡位置図・試掘位置図	9
図 5	試掘遺構平面図	11
図 6	試掘土層断面図 1	12
図 7	試掘土層断面図 2	13
図 8	遺構平面図	15
図 9	遺構平面図(地形図)	16
図 10	土層断面図・土層写真	17
図 11	出土遺物 1	22
図 12	出土遺物 2	23

表目次

表 1	北地アリノ木遺跡周辺の遺跡	5
表 2	出土遺物観察表 1	18
表 3	出土遺物観察表 2	19
表 4	出土遺物観察表 3	20
表 5	出土遺物観察表 4	21

写真図版

- 巻頭写真1 北地アリノ木遺跡遠景（南上より）
- 巻頭写真2 遺跡全景（南西上より）
遺跡全景（上より）
- PL1 遺跡全景（西上より）・遺跡全景（上より）
- PL2 遺跡遠景（南西上より）・遺跡遠景（南西上より）
- PL3 調査前風景（本調査該当場所）・調査前風景（本調査該当場所）
- PL4 調査前風景（試掘該当場所）・測量中（試掘調査にて）・試掘TR18検出状況・試掘TR18
作業風景・試掘TR19検出状況・試掘TR20検出状況
- PL5 遺構検出状況（S - 2区）・遺構検出状況（N - 1区）・バンク北壁土層・バンク南壁土
層・作業風景・作業風景
- PL6 遺構完掘状況（北西より）・遺構完掘状況（南より）・遺構完掘状況（西より）・遺構完
掘状況（N区・南西より）・遺構完掘状況（N - 2・N - 3区）（南より）・遺構完掘状況
（南西より）
- PL7 出土遺物1（土師器・磁器） 1～7
- PL8 出土遺物2（磁器） 8・10・14・15
- PL9 出土遺物3（磁器） 9・11・12・13・16
- PL10 出土遺物4（陶器） 20・21・22
- PL11 出土遺物5（陶器） 23・24・25・26
- PL12 出土遺物6（石器・木杭） 30・31～33

第 章 遺跡周辺の地理的・歴史的環境

1 . 地理的環境

北地アリノ木遺跡の所在する高知県土佐市は、高知県のほぼ中央の、仁淀川の右岸に位置する。東は仁淀川を境にして吾川郡春野町に接し、北及び西は虚空蔵山系で、吾川郡伊野町、高岡郡日高村、高岡郡佐川町に接し、南は横瀬山系（御領寺山系）を境に須崎市に接する。南の一部は直接、土佐湾に開く。

地形は、北に虚空蔵山系、中央部に波介川の氾濫原と横瀬山系、南に海蔵寺山系が小区域に分布、竜崎で土佐湾に没す。虚空蔵山系と横瀬山系との間の、高岡町の市街地から中島付近までは、仁淀川の扇状地性の低地が、西方には波介川の氾濫による低地が、南北の幅約 0.7 k m、東西の幅約 4 k mで広がる。宇佐町の市街地は古い砂洲の上で、他の低地は、埋積谷である。虚空蔵山の山麓の南縁には丘陵地が分布し、谷地形が複雑化している。

土佐市と吾川郡春野町との境をなしている仁淀川は、市内の北東部の天崎と、東端の用石や新居では、それぞれ、虚空蔵山系と、横瀬山系を横切り、横谷を形成して流れ、高岡付近や新居付近で扇状地性低地となっている。虚空蔵山系に水源を有する河川としては、東から、火渡川、白川川、末光川、野老谷川、明ヶ谷川、甲原川、宮ノ内川、永野川、市野々川などがあり、これらの各河川の流路は短く 4 k m未満で、南域は東へ向かって流れ、波介川へ注ぐ。横瀬山系に源を



図 1 遺跡位置図 1

発する河川も多く存在し、北流して波介川に注ぐ。これらの各河川は、それぞれの谷に埋積谷を形成して、小規模な低地を造っている。

北地アリノ木遺跡は土佐市北地に所在する。本遺跡は波介川の左岸（北岸）の、波介川の氾濫原として平地が形成され始める、北部の山地から南に伸びる出入りの多い、小起伏の丘陵地の中の一つの先端部分に在り、明ヶ谷の西岸に位置する。北側の山地には、近くに仏像構造線が走る。波介川に伴う平地の南方にも山地が連なり、浦ノ内湾、横浪半島を経て太平洋となる。北地アリノ木遺跡は甲原川と明ヶ谷川が波介川に合流するすぐ近くにあるのだが、波介川と甲原川との合流点付近より東へ4 km、森岡付近までは、常習水害地であって、氾濫原性の低地である。

2 . 歴史的環境

まず、土佐市全体で見ると、古くから確認されているものでは、古い遺跡は、波介川の両岸にほぼ南北方向に延びる支谷の緩傾斜面に多い。現在確認されている市域で最も古い遺跡は西鴨地の徳安遺跡で、二宮神社境内から縄文時代草創期の尖頭器が出土、波介の倉岡からは縄文晩期の土器も出土している。弥生時代の遺跡には銅矛二本が出土した波介万法寺遺跡と、高地性集落遺跡の用石の甫木山遺跡がある。甫木山遺跡からは石錘が出土、仁淀川河口で網漁業を行っていたことをうかがわせる。このほかの弥生時代の遺跡としては、倉岡遺跡や仁淀川沿岸の高岡町野田遺跡がある。また波介から出土したと考えられる有樋式石剣がある。古墳時代になると波介川支流の甲原川流域や、波介川下流の比較的広い平地に大規模な集落が営まれた。また肥沃な高岡平

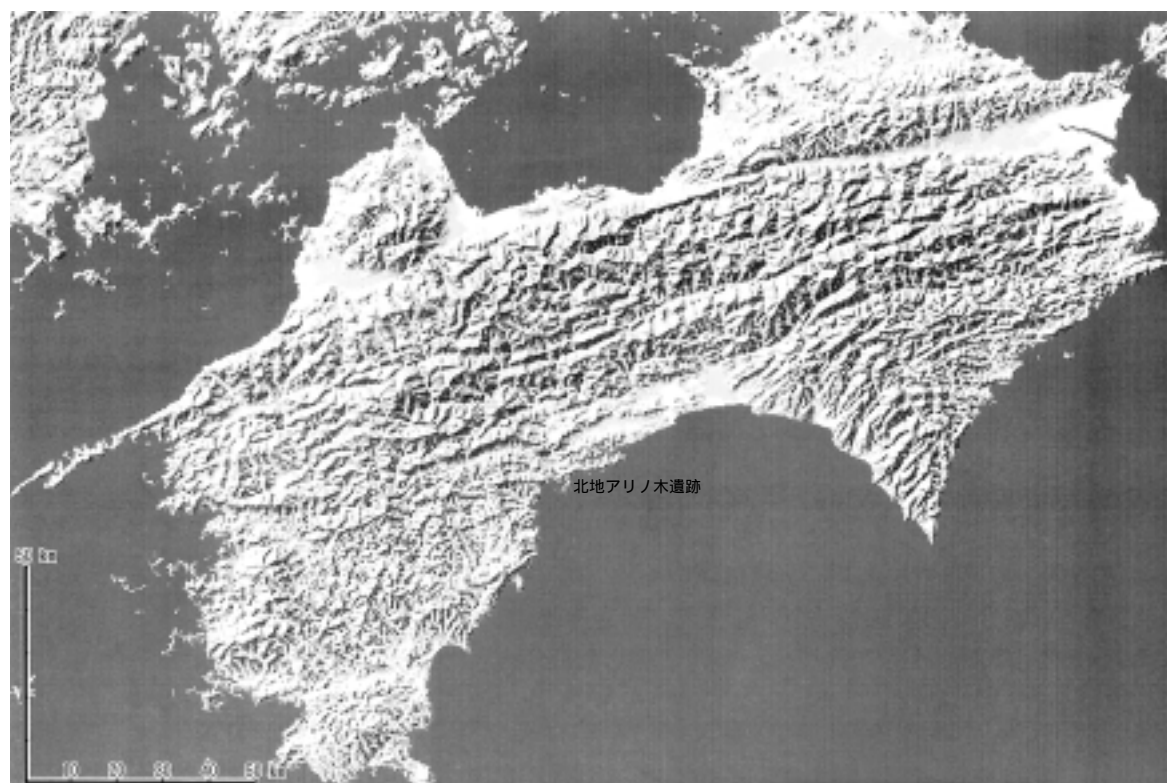


図2 遺跡位置図2

野の生産力を背景に成長したと考えられる古代豪族の墳墓が市域三ヶ所に点在し、このうち股脇谷古墳群は二基の円墳からなる。

市域は承和8年(841)に吾川郡から分離独立した高岡郡(続日本後紀)の東南端に位置し、「和名抄」にみえる高岡郡四郷のうち高岡郷が東北部に、三井郷が東南部新居付近に、海部郷が宇佐町から須崎市浦ノ内にかけての海辺に比定されている。高岡平野には条里制が施行されていたといわれ、高岡町付近には遺構とみられる地割もみられるが確証はない。式内社はないが、四国八十八ヶ所の札所でもある清滝寺や青龍寺があり、波介の若一王子宮境内からは鎌倉初期の経塚遺物と考えられる鏡が出土。なお平安末の混乱期に、平重盛の家人として源希義追討に加わった蓮池権守家綱がいたが(吾妻鏡)、当地蓮池との関連については明らかでない。

平安末か鎌倉初期頃、高岡郷を中心とした地域は高岡庄として後白河院から摂津四天王寺に施入され、波介川上流域には足摺の金剛福寺(現土佐清水市)領戸波郷があった。南北朝時代には「高岡館」は北朝方の有力拠点で、高岡庄内には北朝方の高定信の代官佐脇氏の拠城松風城があった。これに対し戸波郷では名主層の成長がみられた。東方高岡庄の北朝勢力、西方津野庄(現須崎市)の北朝方武将津野氏に挟まれた地にありながら、戸波郷の名主・荘官は南朝方の佐河氏・度賀野氏と通じ、康永元年(1342)には佐河氏らとともに岡本城(現須崎市)攻撃に参戦している。

南北朝の合一後、細川氏が土佐国守護として支配権を確立していくが、細川氏と緊密な関係のあった蓮池城の大平氏は順調に勢力を伸ばして守護代級の国人に成長、土佐七守護の一に数えられた。大平氏は鎌倉初期に讃岐守護となった近藤七国平の末と伝え、蓮池庄を本拠としてその勢力は東は土佐郡鏡川流域(現高知市)・吾川郡南端(現春野町)、南は浦ノ内湾岸(現須崎市)、北は仁淀川中流域(現高岡郡日高村・高岡郡越知町)にまで及んでいる。蓮池城下には蓮池市が成立し、宇佐・井尻は大平氏の外港として畿内と直結、大平氏は文化的にも活躍する。なお蓮池市は長宗我部氏の時代に大高坂城下または浦戸城下(ともに現高知市)に移転する。

大平氏は戦国の混乱が続くなかで次第に衰退し、代わって津野氏を抑えた一条氏が東進してくる。永正14年(1517)蓮池城の西方にある戸波城をめぐる津野氏と一条氏方武士との間に激戦があり、これに勝利をおさめた一条氏は当地での地位を決定的なものにした。しかし東北方の本山氏との争いで蓮池城は落城。その後長宗我部・本山両氏の抗争を利用して一条氏は城奪回を実現させるが、結局永禄12年(1569)に長宗我部氏に攻略され、戸波城も同様に変転して長宗我部氏の支配下に入る。

長宗我部地検帳によれば蓮池城東北方に計画的に作られた高岡市があり、「古市」となった蓮池市に代わって高岡郡東部の経済の中心となった。宇佐では水主・舟頭・舟番匠などの存在が確認される。また黒岩城(現高岡郡佐川町)の城主片岡氏が北地村と宇佐村に所領を得て進出しているのが注目され、甲原村は長宗我部氏の重臣久武内蔵介の代官地となっていた。

また、北地については、東流する波介川の北岸、大平峰の南麓に位置し、東は蓮池村。「土佐州郡志」は「東限高岡小坂山半、西限甲原山・小城山、南限出間・岩戸、北限久坂村馬越山半、東西四十町余南北三十町余」と記す。天象18年(1590)の北地村地検帳によると村内には茗荷谷・野老谷・太福良・シャウフ沢、太和田、末光谷・和田・フタマタ・松力和田・宗安谷・浦重谷・

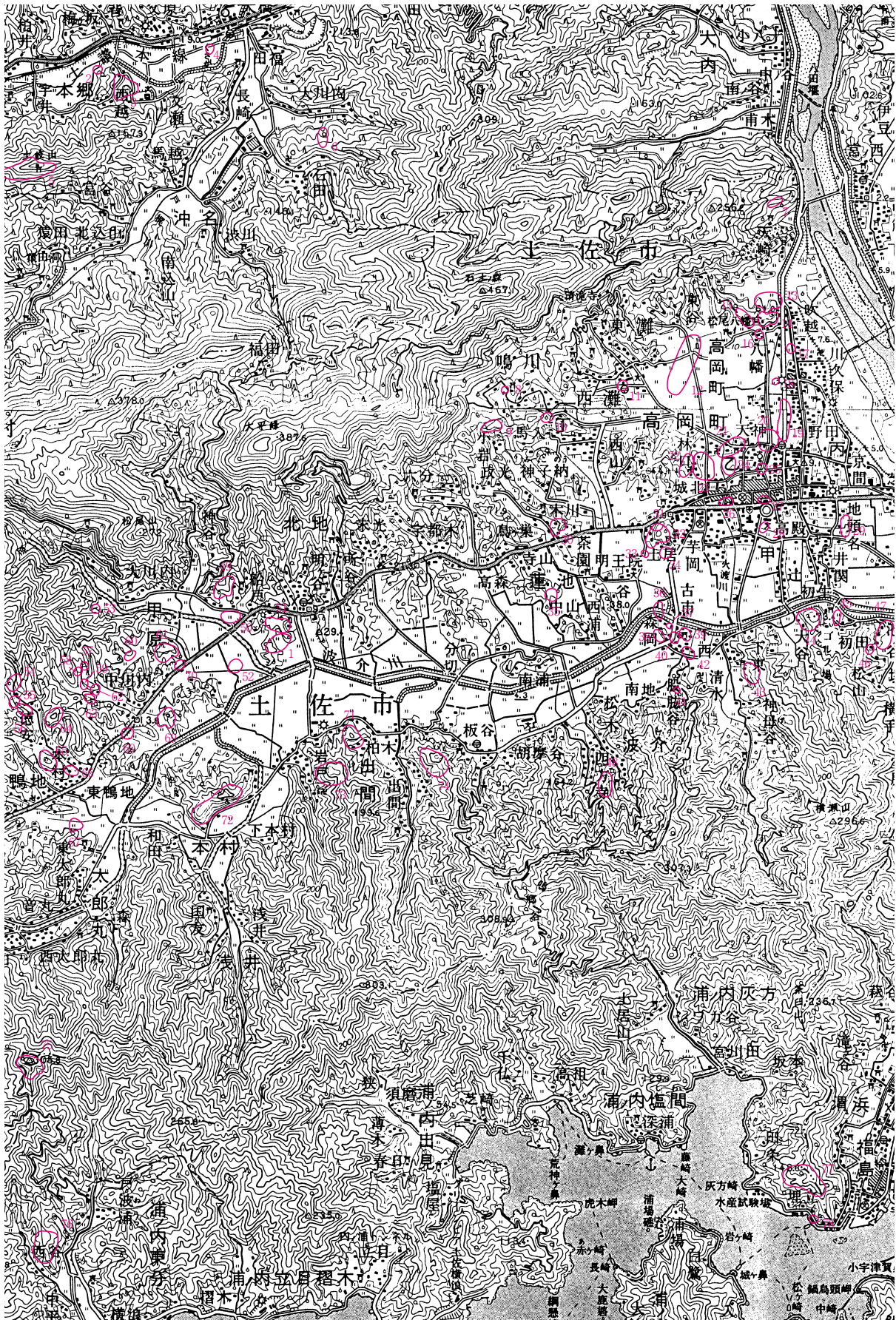


図3 北地アリノ木遺跡周辺の遺跡分布図

ウツヲ木谷・六分一谷・正光・正光谷など17小村があった。検地面積80町3反余、うち田分47町8反余・畠分9町5反余。屋敷97筆で10町3反余、荒12町4反余。ほかに山畑8町2反余、切畑23代。多くの斜面に集落が形成され、すべて片岡分となっているが、その中には村の発達をうかがわせる宗安名・正光氏・末光名・安成名などのかつてあった「名」がみられ、さらに1～2反規模の「名主ヤシキ」「宗安名主ヤシキ」「正光名主ヤシキ」「安成名主ヤシキ」がある。なお「鍛冶ヤシキ」「細工ヤシキ」のホノギもあり、茗荷谷村には「土み沢」、浦重谷村には「上ノ土居」の記載がみられ、池には太池・賀茂池があった。

字明ヶ谷には十二所神社（旧郷社）が鎮座。古来北地村・甲原村・谷地村の総鎮守で、紀州熊野権現を勧請したものと伝え、御年大神を祀る御年神社が境内にある。前記地検帳には茗荷谷村に上ノ坊、野老谷村に円福寺・真光寺、ウツヲ木谷村に龍興寺、正光谷村に大黒寺の寺中を記すがいずれも退転。大黒寺は清滝山賀照院と号した真言宗の寺であったが（土佐州郡志）、宝暦年中（1751～64）薬応寺と改称、毘沙門天を本尊とし、村人寄進の山林3ヶ所を有していた（南路志）。

	名 称	種 別	時 代		名 称	種 別	時 代
1	北地アリノ木遺跡	散布地	弥生～近世	41	股谷古墳	古墳	古墳
2	西之越遺跡	散布地	縄文～弥生	42	波介西本村遺跡	散布地	中世
3	本郷遺跡	散布地	弥生	43	波介法福寺遺跡	散布地	弥生
4	日下経塚	経塚	中世	44	三宝山城跡	城館跡	中世
5	土岐古城跡	城館跡	中世	45	初田遺跡	散布地	古代・中世
6	テンノウ墓地区	古墳	中世	46	西土居遺跡	散布地	弥生
7	清滝愛宕山遺跡	散布地	弥生	47	池ノ谷遺跡	散布地	中世
8	宮ノ谷古墳	古墳	古墳	48	四方寺経塚	経塚	中世
9	鳴川遺跡	散布地	弥生	49	シロクビ城跡	城館跡	中世
10	鳴川深見遺跡	散布地	弥生	50	船戸遺跡	散布地	古墳・中世
11	東灘沖屋敷遺跡	散布地	古墳・中世	51	唐音山城跡	城館跡	中世
12	居徳遺跡群	祭祀・集落跡	縄文～古代	52	甲原中川内遺跡	生産遺跡	中世・近世
13	天崎遺跡	集落跡	弥生～中世	53	大川内遺跡	散布地	中世
14	人麻呂様城跡	城館跡	中世	54	徳安弥生遺跡	散布地	弥生
15	曾我山城跡	城館跡	中世	55	二宮神社近傍遺跡	散布地	縄文
16	八幡遺跡	散布地	古墳	56	徳安縄文遺跡	散布地	縄文
17	御太小宮遺跡	散布地	中世	57	成仏遺跡	散布地	中世
18	八幡光本遺跡	散布地	古代	58	久保田遺跡	散布地	中世
19	野田遺跡	散布地	縄文～中世	59	森光遺跡	散布地	弥生
20	光永・岡ノ下遺跡	集落跡	古墳～中世	60	入沢遺跡	散布地	弥生
21	天神遺跡	集落跡	弥生～近世	61	神明森城跡	城館跡	中世
22	林口城跡	城館跡	中世	62	中川内中世墓地	古墓	中世
23	高岡林口遺跡	散布地	縄文～中世	63	竹ヶ端遺跡	散布地	弥生
24	天神三島遺跡	散布地	弥生～中世	64	徳之森城跡	城館跡	中世
25	犬ノ場窯跡	窯跡	古代	65	イシガトウ城跡	城館跡	中世
26	高岡本町遺跡	散布地	縄文・弥生・中世	66	本村遺跡	散布地	弥生・中世
27	明管寺遺跡	散布地	古墳	67	西鴨地遺跡	集落・生産遺跡	古墳・平安・中世
28	明管寺大古遺跡	散布地	弥生	68	江良澤遺跡	散布地	弥生
29	地頭名遺跡	散布地	古代	69	和田山遺跡	散布地	中世
30	城ヶ森城跡	城館跡	中世	70	鍛冶屋ヶ端遺跡	散布地	弥生
31	蓮池城跡北面遺跡	散布地	中世	71	出間城跡	城館跡	中世
32	蓮池城跡	城館跡	中世	72	伊乃保岐城跡	城館跡	中世
33	蓮池城跡南面屋敷跡遺跡	城館跡	中世	73	松森城跡	城館跡	中世
34	勝賀野次郎兵衛屋敷跡	城館跡	中世	74	鷹股城跡	城館跡	中世
35	寺山遺跡	散布地	中世	75	大領寺山城跡	城館跡	中世
36	森岡遺跡	散布地	古墳	76	中平城跡	城館跡	中世
37	波介土居山古墳	古墳	古墳	77	神崎城 田条城 城跡	城館跡	中世
38	篠本山城跡	城館跡	中世	78	灰方古墳群	古墳	古墳
39	倉岡遺跡	散布地	縄文・弥生				
40	土居山城跡	城館跡	中世				

表1 北地アリノ木遺跡周辺の遺跡

また、近くに甲原船戸遺跡があり、この遺跡は、波介川と甲原川の合流地より約500m上流の甲原川左岸にある。国道56号の北側で標高10m。本格的な発掘調査はされていないが、出土遺物から古墳時代中期の集落関係遺跡とみられる。遺物は4世紀後半から5世紀中葉までの土師器が主で、壺、甕、高杯、また、祭祀用とみられる小型粗製土器も出土している。

また、甲原川の水源に位置する山村である谷地村には法華寺跡がある。これは、谷地の集落西北にあった真言宗の寺院で、現在観音堂と、室町～江戸期と推定される金剛力士像（県指定文化財）のある仁王門が残る。江戸時代には谷地山千手院と号し、佐川（現高岡郡佐川町）の乗台寺末であった（南路志）。性空の開基と伝え、性空は播磨書写山円教寺の開山であるが、寛弘4年（1007）当寺で没したと伝える（南路志）。かつては七堂伽藍を備えた大寺で、天正17年（1589）の佐川郷谷地永野地検帳に法華寺領「大坊寺中」に三間四面の金堂と張道二王堂が記され、塔頭と思われる中の坊・リヤウホン坊・下ノ坊・ホントウ坊・西ノ坊・蓮花坊がみえるが、うち中ノ坊・リヤウホン坊・ホントウ坊は田畠化し、寺領があるのは本寺の大坊と西ノ坊・蓮花坊にすぎない。金堂の本尊は千手観音で、仁王像は「雲溪作仏」とされるが、江戸時代には不動明王を本尊とし、金堂は千手観音堂として境内の一堂となっていた（南路志、土佐州郡志）。また運慶作と伝える仁王像は榛木仁王とよばれていた（南路志）。『土佐幽考』は寺名により当寺を土佐国分尼寺とする。江戸時代初期に衰微していたのを山内監物の先祖が再興、鎮守社の棟札には漢文13年（1673）本山新右衛門の再建とあった（南路志）。

寺辺にはほかにも「大鬼坊」「小鬼坊」と呼ばれる屋敷があった。前記地検帳には「ヲニンホウ」「コニンホウ」のホノギがみえる。谷地の南には奥院があって女人結界の地とされ、性空自作と伝える性空坐像を安置、敷地には古瓦・五輪塔が多数あった（南路志）。性空像は左手に念珠、右手に如意を持ち（土佐幽考）、千手観音・仁王像とともに享保20年（1735）朝倉（現高知市）の光泉寺で開帳された（南路志）。等である。

また最近では、居徳遺跡群をはじめとし、天崎遺跡、人麻呂様城跡、林口遺跡、天神遺跡、光永・岡ノ下遺跡、西鴨地遺跡、甲原中川内遺跡、北高田遺跡他多くの発掘調査が実施され、貴重な新しい発見がなされている。

【参考文献】

- 『高知の地名』日本歴史地名大系40巻 平凡社 1983年
- 『39 高知県』角川日本地名大辞典 角川書店 1986年
- 『土佐市史』 1978年

第 章 調査に至る経過と調査の方法

1 . 調査に至る経過

四国横断自動車道(伊野～須崎間)建設工事に伴い、事前に高知県教育委員会事務局文化振興課(現、文化財保護室)と日本道路公団高松建設局(現、四国支社)高知工事事務所との間で、工事範囲内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議・調整が行われ、伊野町・土佐市・須崎市の建設工事予定地内について必要と判断される場所について試掘調査を実施することとなった。

土佐市北原地区については、調査の都合上、2年度に分けて、試掘調査が計画され、最初の試掘調査は平成8年度に実施され、その結果遺跡の存在が確認され、「甲原中川内遺跡」とされた。本報告書に記載された北原地区試掘調査は第2年次の試掘調査であり、平成9年4月1日付けで、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターと日本道路公団高松建設局との間で、「平成9年度四国横断自動車道(南国～伊野及び伊野～須崎)埋蔵文化財発掘調査委託契約」が締結され、調査が実施された。

第2年次の北原地区試掘調査は、平成9年11月10日から調査に関する事前の現地での準備が行われ、試掘調査機械掘削が開始された。

試掘調査の結果、遺構及び遺物が集中して検出された部分について、協議・調整の結果、本調査を実施することとなり、また、この遺跡を「北原遺跡」として取り扱うこととなったが、後に地元等の意向もあり「北地アリノ木遺跡」と改称し、正式にこの名称で遺跡として指定している。

本調査は、平成10年4月1日付けの「平成10年度四国横断自動車道(南国～伊野及び伊野～須崎)埋蔵文化財発掘調査委託契約」により、平成10年5月18日より開始され、平成10年9月16日まで実施し調査を完了した。

2 . 調査の方法

土佐市北原地区の平成9年度試掘調査は、当初、調査箇所を20設定して、それぞれの調査区について調査を実施した。まず、試掘調査については、基本的には一つが4m×4mの試掘トレンチとし、現地の地形等の諸条件に応じたトレンチを設定し、パワーショベル及び人力により表土を除去した後、人力により遺物包含層の掘削及び遺構の検出・掘り下げを行った。検出遺構・遺物の出土状況及び土層については写真撮影を行い、測量により平面図・断面図を作成した。これらの試掘調査の成果を基礎資料として、本調査の必要な範囲を設定し、本調査を実施した。

本調査については、調査範囲に調査区を設定し区分したうえで、それぞれ、除草・伐採を行い、表土等をパワーショベルにより掘削した後、遺構包含層を人力により掘り下げ、遺構・遺物の検出作業を進めた。出土遺物の取り上げ、検出遺構の完掘等、調査を進めた。検出遺構・遺物出土状況・土層は写真撮影を行い、測量により平面図・断面図を作成することにより、写真・図面の

形で記録を残した。

測量については、試掘は既存する基準点・水準点及び工事用の基準点等を利用して、公共座標を基に、また、本調査ではさらに、それぞれの調査区内に基準点を展開、設置し公共座標を基本に実施した。

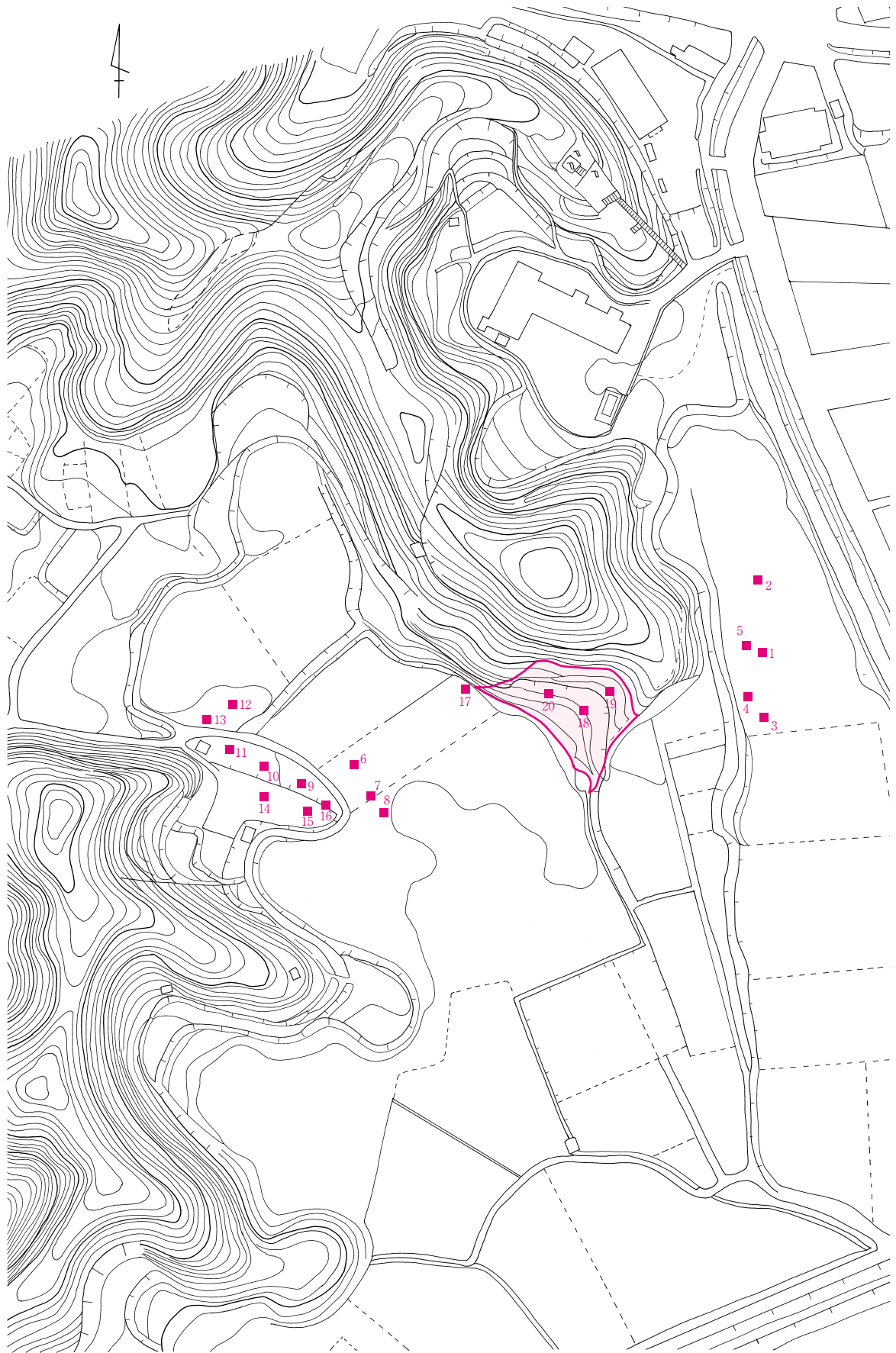


図4 遺跡位置図・試掘位置図

第 章 調査成果

1 . 調査区の概要

北地アリノ木遺跡は土佐市北地の、波介川の北岸に所在する。ここは、波介川と、北側の山地から流れてきた甲原川と明ヶ谷川との合流点の近くであり、山地から続く丘陵地の先端部分及び氾濫原性の低地にあたる。周辺には各時代の遺跡が多く存在し、今回の調査対象範囲についても遺跡の存在の可能性が高いと考えられていた。試掘調査及び本調査の具体的な成果は後述する。

北地アリノ木遺跡の基本的な堆積状況は、図10に示したとおりであり、本調査部分は基本的に丘陵の斜面であり、そこに部分的にテラスのようになった場所があるという状況である。その斜面に層状に堆積が見られる。その内容は、暗灰褐色の礫層の上に赤黄褐色土（黄色・橙色小礫少混）があり、これらを地山と考え、その上に黒褐色土、黒色土、黄灰褐色土、黄褐色土が堆積している。検出された遺構の埋土は、いくつかのそれほど古い時代のものではないと考えられる土坑については異なるが、それ以外のピット、溝状遺構、土坑については、いずれも黒色及び黒褐色、暗褐色の粘質土である。

2 . 試掘調査

北地アリノ木遺跡を含む北原地区の第2次の試掘調査は平成9年度に実施され、遺跡の存在、範囲等が確認された。調査範囲は図4にあるように、明ヶ谷川の西岸の低地から小丘陵の西斜面、そして丘陵に挟まれた谷部分を経て、西側の丘陵部分の東側に設定し調査を実施した。結果は図5・図6・図7にあり、TR1～TR5では堆積が厚く、元は深い谷状の部分であったと考えることができる結果であった。丘陵に近い場所のみテラス状の部分があり、溝状の遺構らしきものが検出された。TR14～TR16は丘陵部が掘削されたとみられ、遺構は検出されなかった。TR9～TR13では丘陵が谷に落ち込む途中のテラス状の部分が発見され、図5にあるような遺構が確認された。TR6～TR8、TR12、TR17ではTR1～TR5と、ほぼ同様の状態でほとんど遺構の検出はされなかったが、TR6では木杭が発見された。これについては、北地アリノ木遺跡で出土している古代の土師器片と同時代の物の可能性が考えられる。水田施設等が存在した可能性がある。TR18～TR20では、図5にあるように密度の高い遺構が発見された。以上の結果から、本調査はTR18～TR20の周辺について実施することとなった。他の場所については、遺構の検出及び遺物の出土はみられたが、少量であり、また、範囲が狭く、その上、湧水が非常に多く、諸条件を検討した結果、本調査の調査対象範囲が決定された。

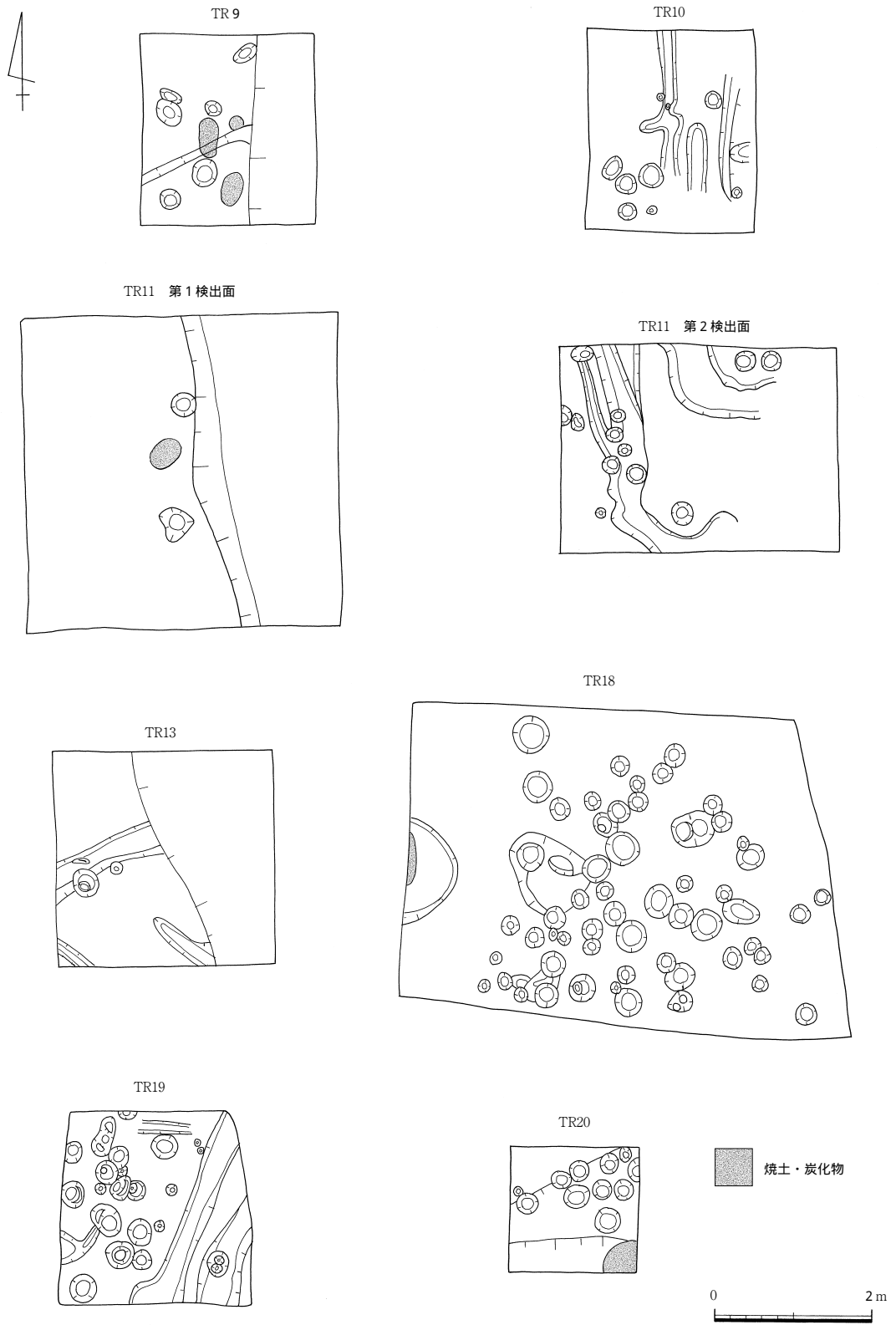


図 5 試掘遺構平面図

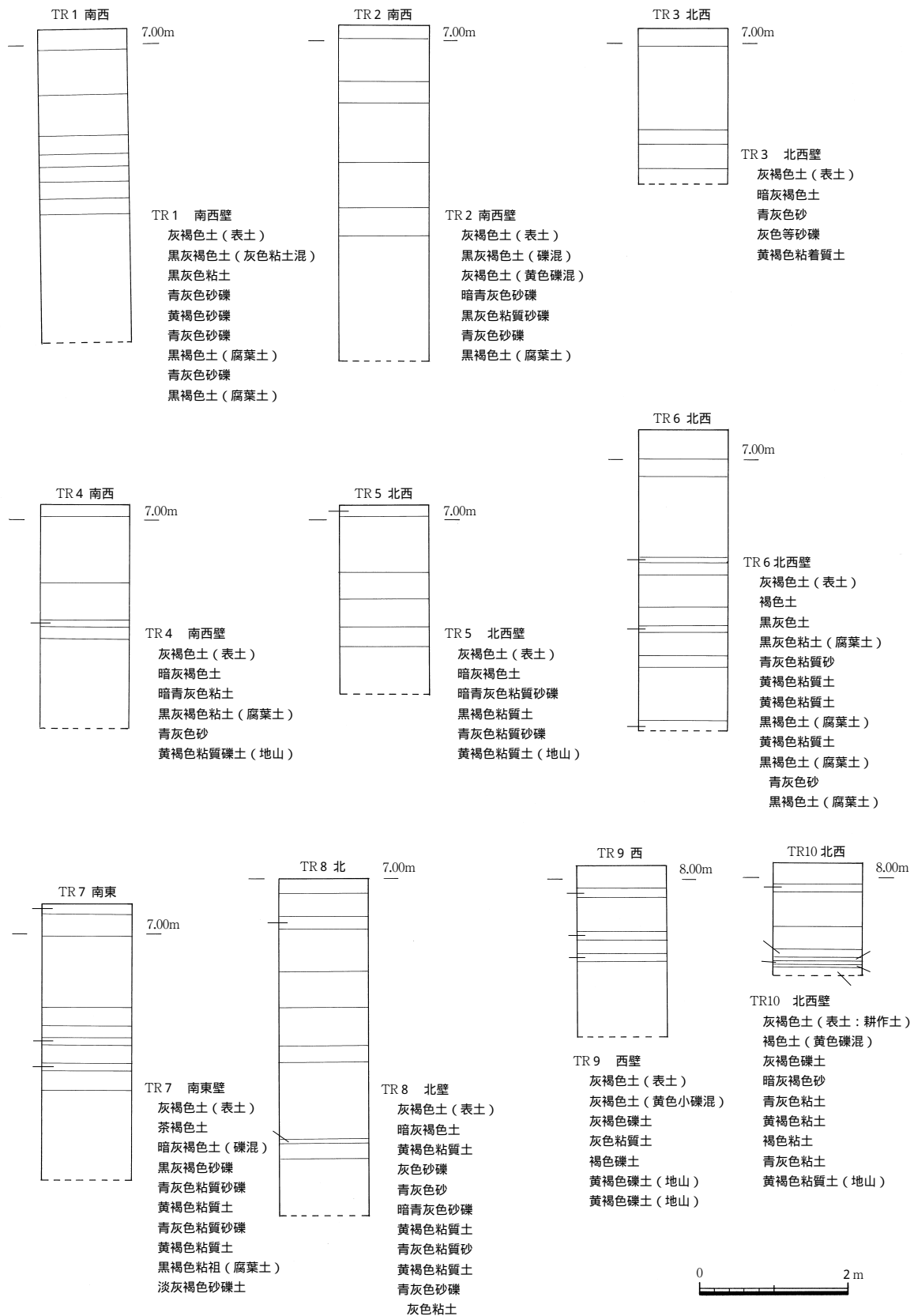


图 6 試掘土層断面图 1

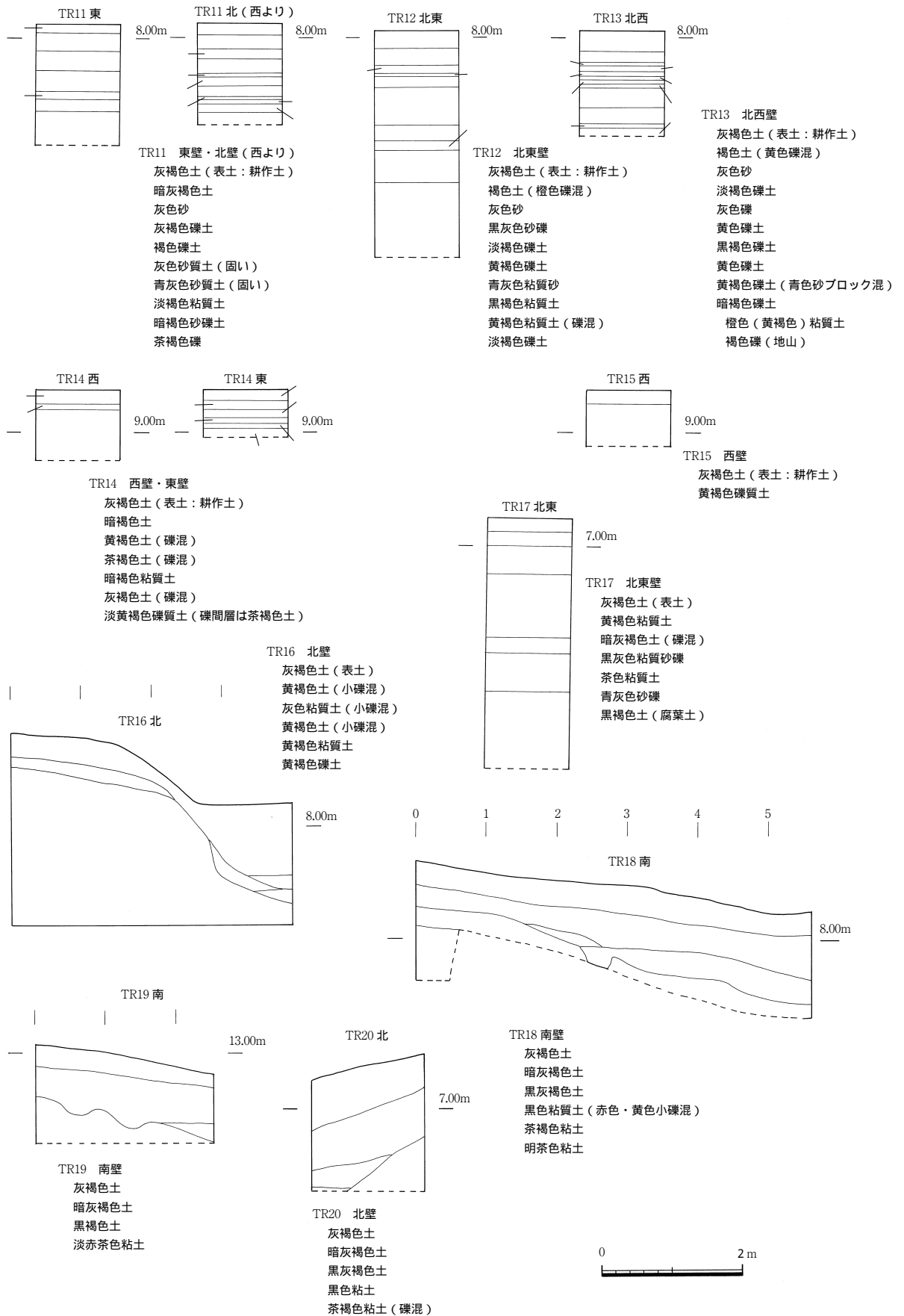


図 7 試掘土層断面図 2

3. 検出遺構と遺物

(1) 検出遺構

北地アリノ木遺跡の本調査について、まず調査区を5ヶ所(N-1・N-2・S-1・S-2・S-3)に設定し(図8)調査を実施した。

検出された遺構は溝状遺構、土坑、ピット等である。溝状遺構はS-1区からS-2区を通過してS-3区まで続いており、幅は約1.5mから2mである。部分的に3mほどに広がっている所がある。深さは20cmから30cmである。丘陵の斜面の上部から発生し現在灌漑用の池となっているところまで流れ込む形になる。この遺構が機能していた当時は現在よりも延長も長かったと推測できる。

土坑については、N-1区、S-1区に並ぶ形で検出された。10個の土坑については、大きさは、直径が約150cmで、深さはいずれも約50cmである。斜面に垂直に掘り込む形をとっている。

ピットはすべての調査区で検出されており、合計で約500を数えた。内容は大小の差は存在するが、平均的、及び、最も数の多いピットの大きさは、直径が約50cmで深さが約30cmから約20cmであった。また、直径が約30cmから約20cmの杭跡と思われるものも、並ぶ形で検出されている。

(2) 出土遺物

遺物の出土は少なく、遺跡に伴う多くは斜面直下の池(遺跡の機能していた当時は現在より深い谷状或いは低湿地等)に落ち込んだものと考えられる。今回の調査でも池の水面下にあたる部分では、溶けてしまい、形状を確認できない土器と思われる遺物も見られた。地上部分で出土し、実測を実施したものについて記しておく。まず、土師器の皿、土師器の杯があり、時代は共に古代で8世紀後半から9世紀ではないかと考えられる。次に磁器では、白磁菊皿、染付碗(肥前系他)、染付鉢(肥前系他)、染付蓋(肥前系)、染付碗蓋、碗があった。次に陶器では、小皿(能茶山)、碗、染付碗(瀬戸・美濃)、陶胎染付碗(瀬戸・美濃)、皿(瀬戸・美濃)、灯明皿、火入れ、鉢、焼締陶器の播鉢があった。他に、敲石(緑色礫岩)、木杭がみられた。

他に実測するには至らなかったが、弥生土器の可能性が考えられる土器の小片も出土していた。

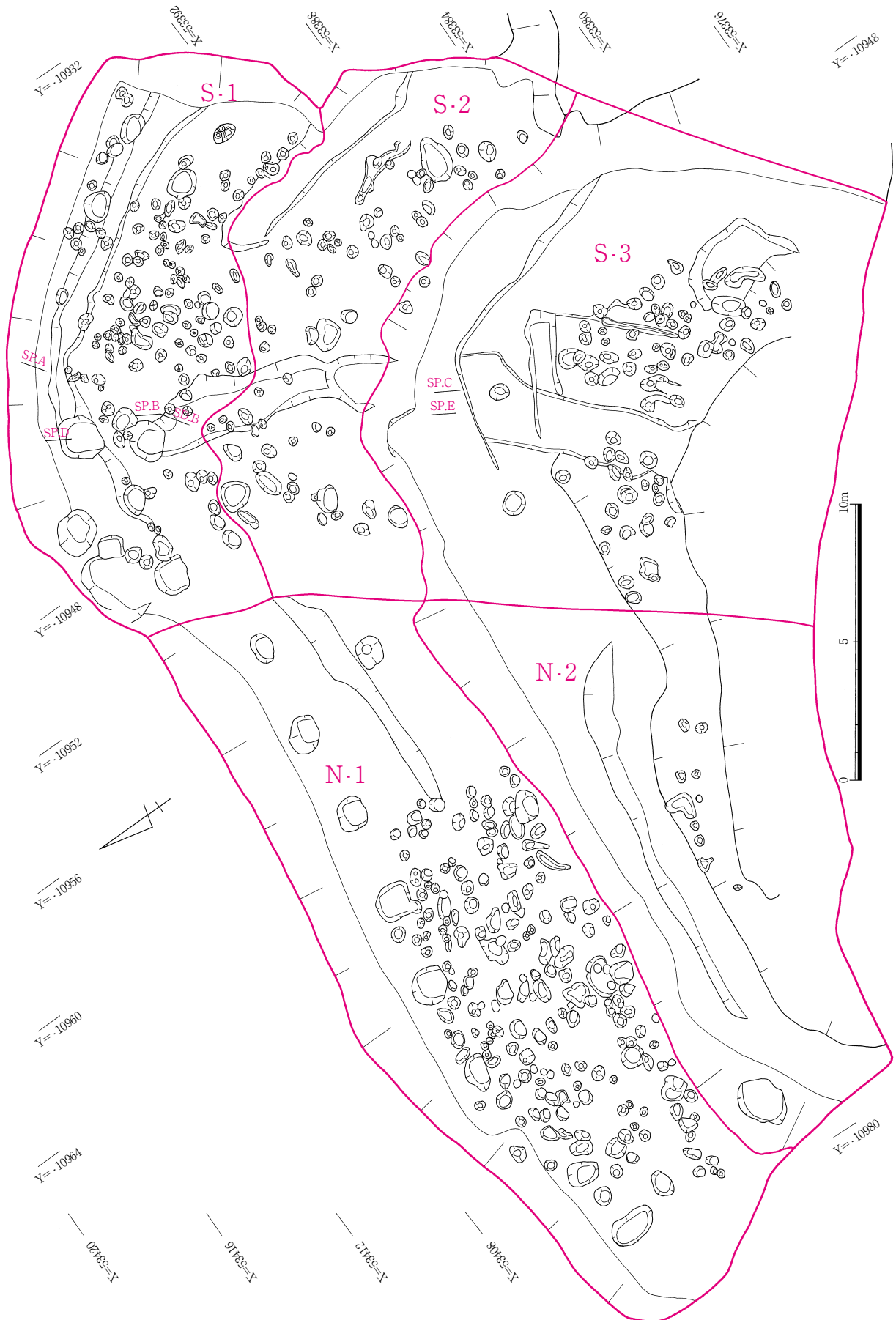


図 8 遺構平面図



图9 遺構平面図(地形図)

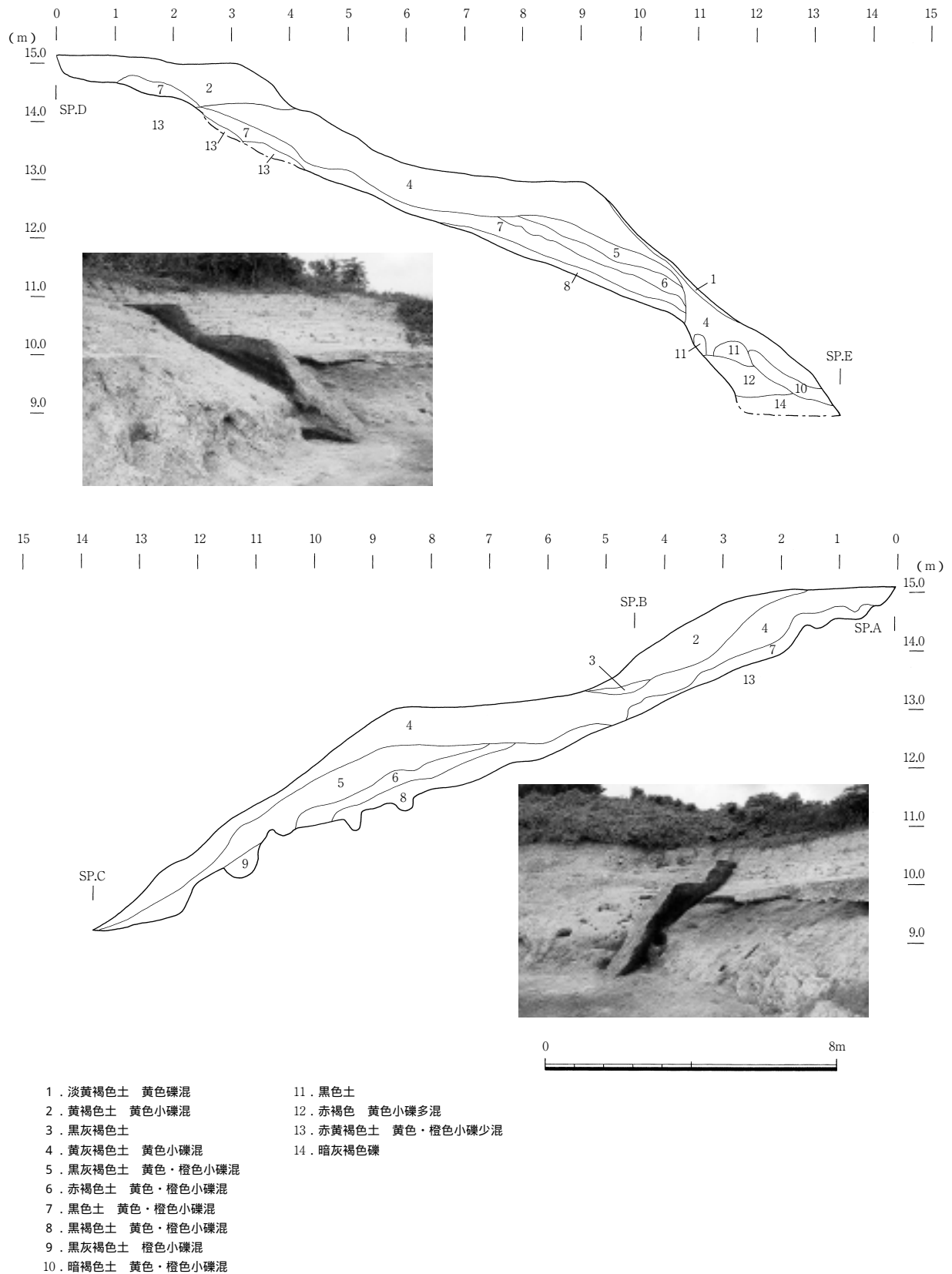


图10 土層断面図・土層写真

図版 番号	出土場所	器 種	法 量 (cm)				特 徴	備 考
			口 径	器 高	胴 径	底 径		
1	S-3	土師器皿	18.0	1.7		15.0	内外面共に浅黄橙色10YR 8/4。胎土は浅黄橙色で底部は内外面共に灰色、赤色風化礫を多量に含む。内外面共に摩耗が進む。外面口縁部にナデ、外反する。焼成の悪い須恵器の可能性が有る。	古代（8世紀後半～9世紀）
2	S-3	土師器杯	10.0	(2.2)			内外面共ににぶい橙色7.5YR 7/4。胎土はにぶい橙色で赤色風化礫を含む。内外面共に摩耗が進む。	古代 (平安時代?)
3	N-2	磁器 白磁 菊皿		(1.2)		4.6	内外面共に灰白色5Y8/1。胎土は白色～灰白色で、剥離面はやや粗く裂孔が存在。畳付釉剥ぎ。細かい貫入有り。	
4	S-3	磁器 染付 碗	12.0	(2.6)			内外面共に明緑灰色7.5GY 8/1。胎土は白色～灰白色で、剥離面はやや滑らか。釉は青みを帯びる。文様は不明。	
5	N-2	磁器 染付 碗	10.0	(3.1)			内外面共に明青灰色5B7/1。胎土は灰白色で、剥離面はやや滑らか。透明釉は青色を帯びる。内外面に圏線。口縁部内側に濃み線。端反り形。	肥前系19世紀
6	S-2	磁器 染付 碗	10.0	(3.2)			内外面共に灰白色N8/。胎土は白色で、剥離面はやや粗く、円孔が存在。内面の口縁部に帯、圏線。外面に草花文。端反り形。	肥前系19世紀
7	S-1	磁器 染付 碗	10.0	(2.2)			内外面共に灰白色N7/。胎土は灰白色で、剥離面はやや粗い。呉須は酸化気味のため緑灰色を帯びる。釉は青味がかかる。薄手のつくり。外面に縦縞他、内面口縁部に格子文。	
8	S-1	磁器 碗		(2.3)		4.0	内外面共に灰白色10Y7/1。胎土は灰白色で、高台付近はにぶい橙色、茶色～黒色の微細粒を含む。外面高台脇に削り痕。釉は明緑灰色を帯びる。高台内まで施釉するが部分的に露胎。	

表2 出土遺物観察表1

図版 番号	出土場所	器 種	法 量 (cm)				特 徴	備 考
			口 径	器 高	胴 径	底 径		
9	S-3	磁器 染付 碗		(1.6)		4.4	内面は明緑灰色7.5GY8/1、 外面は明青灰色10BG7/1。胎 土は灰白色で、剥離面はや や滑らか。高台は「八」の 字状に開く。高台外面に圈 線。呉須は青灰色。	肥前系
10	S-2	磁器 染付 鉢		(3.0)		8.0	内外面共に明青灰色5B7/1。 胎土は白色で、剥離面はや や滑らか。蛇の目高台。高 台は無釉で直立する。見込 みは帯線、草花文。外面に 圈線、花文。底部内外面に 工具痕が顕著。コバルトに よる型紙刷り。	近代
11	N-2	磁器 染付 碗		(2.6)		5.0	内外面共に灰白色N7/。胎土 は灰白色で、剥離面はやや 粗い。内面の文様は不明 (圈線?)。畳付釉剥ぎ、砂 粒が付着。	肥前系
12	N-2	磁器 染付 碗		(3.3)		3.0	内外面共に明青灰色5B7/1。 胎土は白色で、剥離面はや や滑らか。内外面に圈線を 巡らす。透明釉はやや青味 がかかる。見込みは蛇の目 釉剥ぎ。	18世紀
13	N-2	磁器 染付 鉢		(2.2)		6.0	内外面共に灰白色10Y8/1。 胎土は白色で、剥離面はや や滑らか。内面は文様不明。 呉須は青灰色を帯びる。内 面に貫入が入る。高台畳付 まで釉を施し、高台内は無 釉で、砂粒が付着。	肥前系
14	N-1	磁器 染付 碗	9.8	5.5		5.0	内外面共に灰色7.5Y8/1。胎 土は白色で、剥離面はやや 粗い。呉須は酸化気味で緑 灰色～暗緑灰色に発色。外 面に草花文。高台に帯線。 内面は見込みに圈線。畳付 は釉剥ぎ。広東形。	肥前系1780～幕 末
15	S-2	磁器 染付 蓋		(2.4)		摘み径 4.0	内外面共に灰白色5GY8/1。 胎土は白色で、剥離面はや や粗い。内面は圈線内に五 弁花文。外面は蓮弁の変化 (ラマ蓮弁?)唐草文。摘み 内に二重圈線。摘みは「八」 の字状に開く、断面は逆台 形状。透明釉は青味を帯び る。内面に工具による調整 痕。端反り形。	肥前系19世紀

表 3 出土遺物観察表 2

図版 番号	出土場所	器 種	法 量 (cm)				特 徴	備 考
			口 径	器 高	胴 径	底 径		
16	S-2	磁器 染付 碗蓋		(1.7)		摘み径 5.0	内外面共に明青灰色5B7/1。胎土は白色で、剥離面はやや粗い。摘み内に竹文。外面の文様は不明。見込みは圏線、鷲文。透明釉はやや青味がかかる。広東碗。	
17	N-2	陶器 小皿	12.0	(2.9)			内外面共に褐色7.5YR4/4。胎土は褐灰色で、細粒砂を含む。中位に沈線が巡る。焼成不良のため褐色を帯びる。鉄釉。丸形。	能茶山 幕末～
18	N-2	陶器 小皿	13.0	(2.7)			内外面共に黒褐色10YR2/2。胎土は褐灰色で、細粒砂を含む。外面にろくる目。鉄釉。端反り形。	能茶山 1820～ 幕末
19	N-2	陶器 小皿	14.0	(3.0)			内外面共に黒褐色10YR2/2。胎土は褐灰色で、細粒砂を含む。外面にろくる目、下半は工具による削り痕が残る。見込みは蛇の目釉剥ぎ。鉄釉。端反り型。	能茶山 1820～ 幕末
20	S-3	陶器 碗	9.0	(2.3)			内外面共にオリーブ黄色5Y6/4。胎土は灰白色で堅緻、裂孔存在。細かい貫入が入る。灰釉碗。	
21	S-1	陶器 碗	11.6	(3.0)			内外面共に淡黄色5Y8/3。胎土は灰色で、白色砂粒をわずかに含む。口縁部内面に弱い段を成す。釉は白濁し、灰白色を帯びる。灰釉碗。	
22	TR6	陶器 碗	10.4	(3.8)			内外面共に灰オリーブ色5Y6/2。胎土は黄灰色。細かい貫入が入る。内面に気孔が存在。釉は灰オリーブ色に発色。口縁部に釉の濃い部分が帯状に入る。灰釉碗。	
23	S-2	陶器 染付 碗	11.0	(2.2)			内外面共に灰白色7.5Y7/1。胎土はにぶい黄褐色で、粗く、黒褐色の細粒砂を含む。粗い貫入が入る。花卉文、呉須はやや滲む。広東形。	瀬戸・美濃 19世紀
24	S-2	陶器 陶胎染付 碗	11.6	6.0		6.0	内外面共に灰白色7.5Y7/1。胎土は淡黄色で、粗く、円・裂孔が存在。呉須は滲む。外面の高台脇に圏線、花文。内面は圏線と花文。貫入が入る。畳付は無釉。広東形。	瀬戸・美濃

表4 出土遺物観察表3

図版 番号	出土場所	器 種	法 量 (cm)				特 徴	備 考
			口 径	器 高	胴 径	底 径		
25	S-1・S-2	陶器 皿	24.0	(4.9)			内外面共に灰白色10Y7/1。胎土は白～黄白色で、長石他の砂粒を含み、円・裂孔が存在。灰釉。鏝縁形。口唇部は平らな面を成す。呉須。鉄絵。貫入が入る。呉須文様は不明。鉄絵文様は蝶文。外面底部付近は露胎。	瀬戸・美濃19世紀
26	S-2	陶器 灯明皿 (上皿)	9.0	(2.0)			内面は灰白色5Y8/2、内面は灰白色5Y7/2。胎土は灰白色で、赤色風化礫を少量含む。内面は灰釉。外面は口縁部下より無釉。外面は下半に工具痕が顕著。細かい貫入が入る。内面に剥落粒が付着。	
27	TR18	陶器 火入れ	10.4	(4.3)			内面はにぶい赤褐色5YR5/4、外面は黒褐色7.5YR3/2。胎土は灰白色～灰赤色。円・裂孔が存在。白色砂粒を含む。外面と口縁部内面に鉄釉。露胎部分は明赤褐色。口縁部は内側に肥厚し、端部を丸くおさめる。内面はナデ、外面は弱いろくろ目。筒型。	
28	S-2	陶器 鉢類	15.6	(2.9)			内外面共に黒褐色10YR3/1。胎土は灰色で、中心部はにぶい橙色。内外面は鉄釉。外面に工具による弱い調整痕が見られる。口縁端部は外側に肥厚する。	
29	TR18	焼締陶器 播鉢	24.0	(5.1)			内外面共に灰赤色2.5YR4/2。胎土は赤褐色～赤橙色で、石英の砂粒を含む。口縁部外面に2条の沈線を持つ。端部は丸くおさまる。内面端部に1条の沈線が巡り、体部との境で屈曲して立ち上がる。無釉。	堺系
30	TR20	敲石	全長 14.5	全幅 6.1	全厚 3.6	重量 570g	緑色礫岩。両端部、側縁部に明瞭ではないが敲打痕が見られる。	
31	TR6	木杭	全長 21.2	全幅 3.7	全厚 3.2			
32	TR6	木杭	全長 26.1	全幅 3.0	全厚 3.1			
33	TR6	木杭	全長 26.2	全幅 3.2	全厚 3.0			

表 5 出土遺物観察表 4

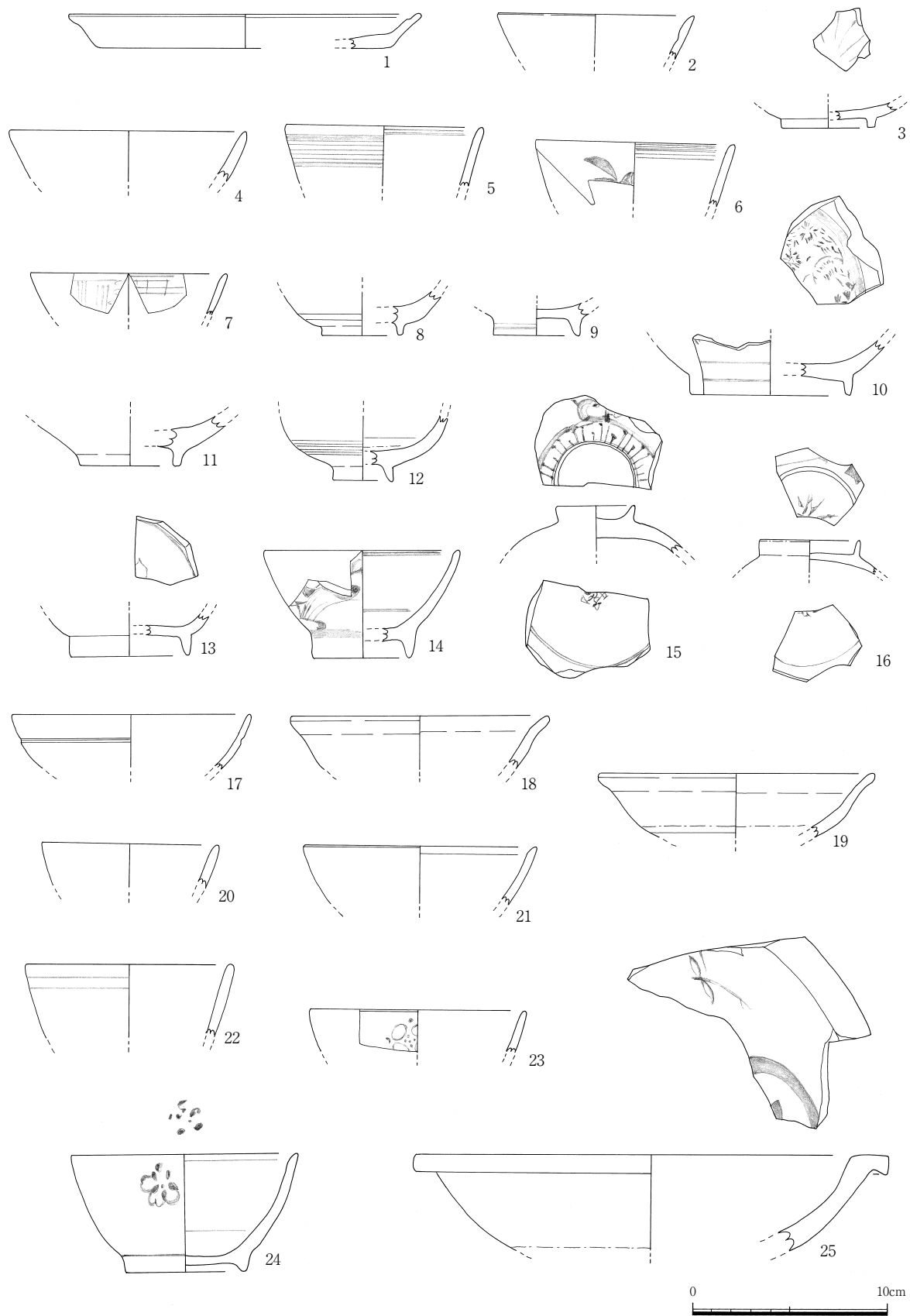


图11 出土遺物 1

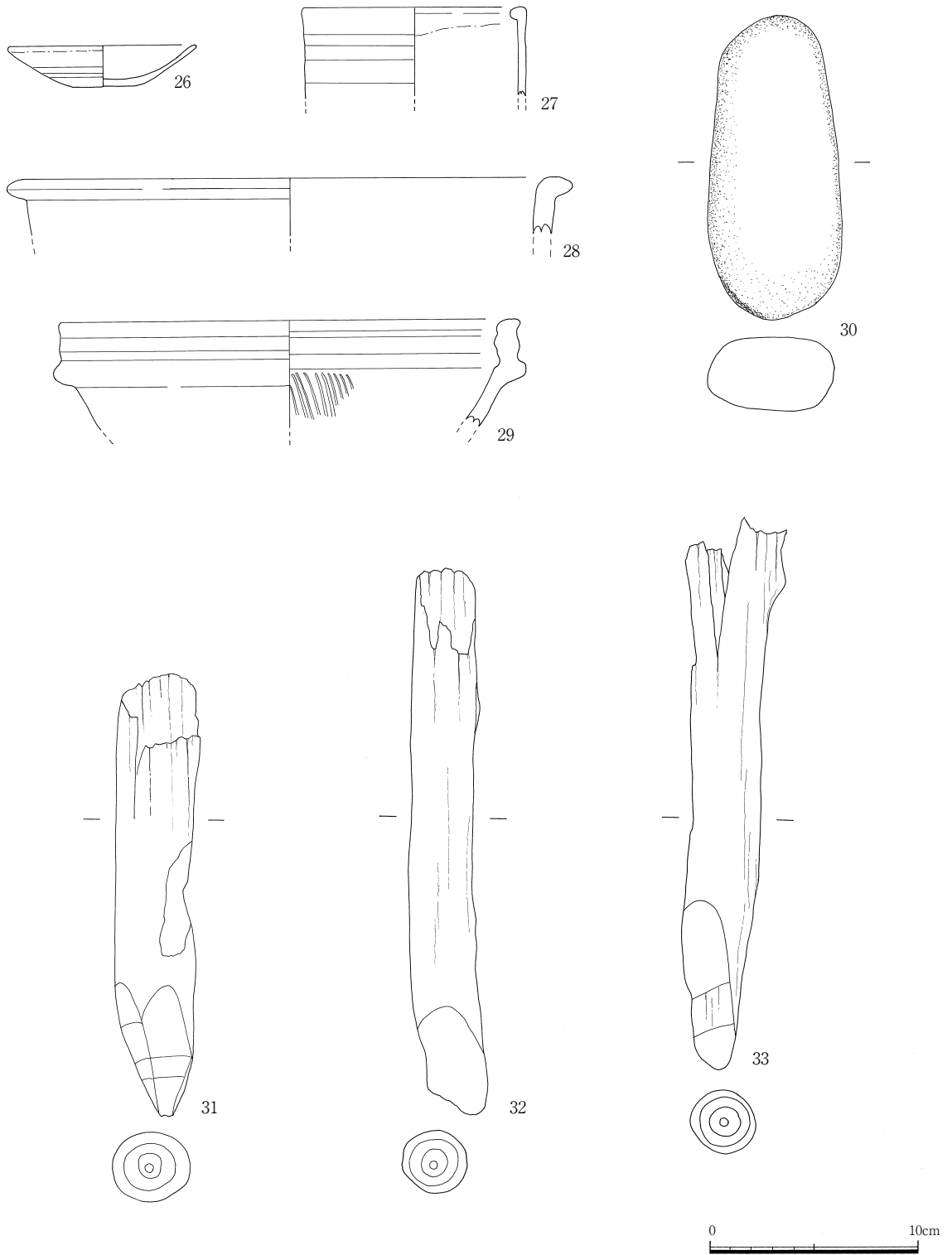


图12 出土遺物 2

第 章 考察

まず、遺跡の時代であるが、検出遺構及び出土遺物を推測の材料にして考えると、まず調査区の上方で検出されていた約10個の土坑の時期は、古くとも近世以降であると考えられる。この土坑の性格であるが、これはおそらく果樹の植えられていた跡であろう。周辺でも多くの文旦が栽培されており、この果樹栽培によって掘削されたものに違いないと思われる。近世の陶磁器の出土については遺構・遺物等の関係で考えても明確な解答はでないが、この丘陵の東側には墓地があり、それに関係があるということが考えられる。遺跡の在るこの丘陵は、当初は波介川まで緩い傾斜で続いていたもので、遺跡の位置も本当に丘陵の先端というわけではなかった。そこで、当時は現在よりも広い平面的な空間が存在していたとしたら、何らかの生活に関わる場が設けられていた可能性が考えられる。ピットと溝状遺構の時期だがこれは、遺構埋土の状態及び、土師器の出土等から考えて、中世以前の遺構として推測することができるのではないだろうか。さて、その遺構の性格だがピットの規模からみて、柱穴と捉えられるものと、杭跡と捉えられるものの2種類に分けられる。杭跡に分類できるものについてはある程度並びもみられるが、柱穴に分類されるピットについては建物がどのように建つのか、柱と柱の関係がどのようになるのかははっきりしない。全般にみて性格は不明であるという答えが出てくる。

しかし、土師器や時代不明の土器片が出土していることから考え、その古い時代に、この「北地アリノ木遺跡」という場所において人間が何らかの生活の営みを行っていたことは間違いない事実なのである。盛土を行い畑として耕作されていた場所の地下深くからは、木杭が出土しており、当時はそこで水田耕作が行われていたか、または、川の近くということもあり何らかの川岸の施設があった可能性が推測できる。また、それよりも時代を遡ると、その部分にはまだ堆積が少なく、谷状の地形が考えられる。となると、試掘で検出されたテラス状の部分の遺構も、その遺構の機能していた時代に何らかの生活の場であったということが断言できる。

北地アリノ木遺跡の本調査範囲の直下（南西側）は、現在、池になっており、周辺の水田の水源となっていることから、この池の部分そのものは発掘を行わなかったが、推測ではあるがこの部分からさらに南西側の低湿地の地下に古い時期の遺物は眠っているのではないだろうか。「北地アリノ木遺跡」の西側の丘陵を越えた甲原川の近くでは低い土地で、古い時代の遺構も遺物も見つかっており、同様に本遺跡でも存在したのと同じと考えることができる。

写真図版



遺跡全景（西上より）



遺跡全景（上より）



遺跡遠景（南西上より）



遺跡遠景（南西上より）



調査前風景（本調査該当場所）



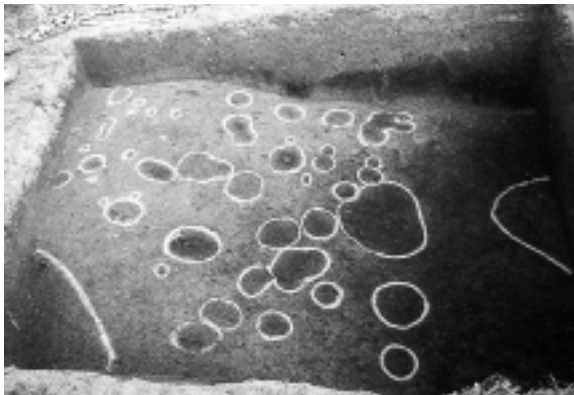
調査前風景（本調査該当場所）



調査前風景（試掘該当場所）



測量中（試掘調査にて）



試掘TR18検出状況



試掘TR18作業風景



試掘TR19検出状況



試掘TR20検出状況



遺構検出状況 (S - 2区)



遺構検出状況 (N - 1区)



バンク北壁土層



バンク南壁土層



作業風景



作業風景



遺構完掘状況（北西より）



遺構完掘状況（南より）



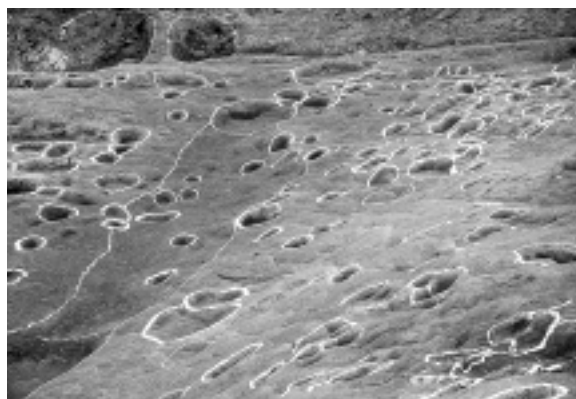
遺構完掘状況（西より）



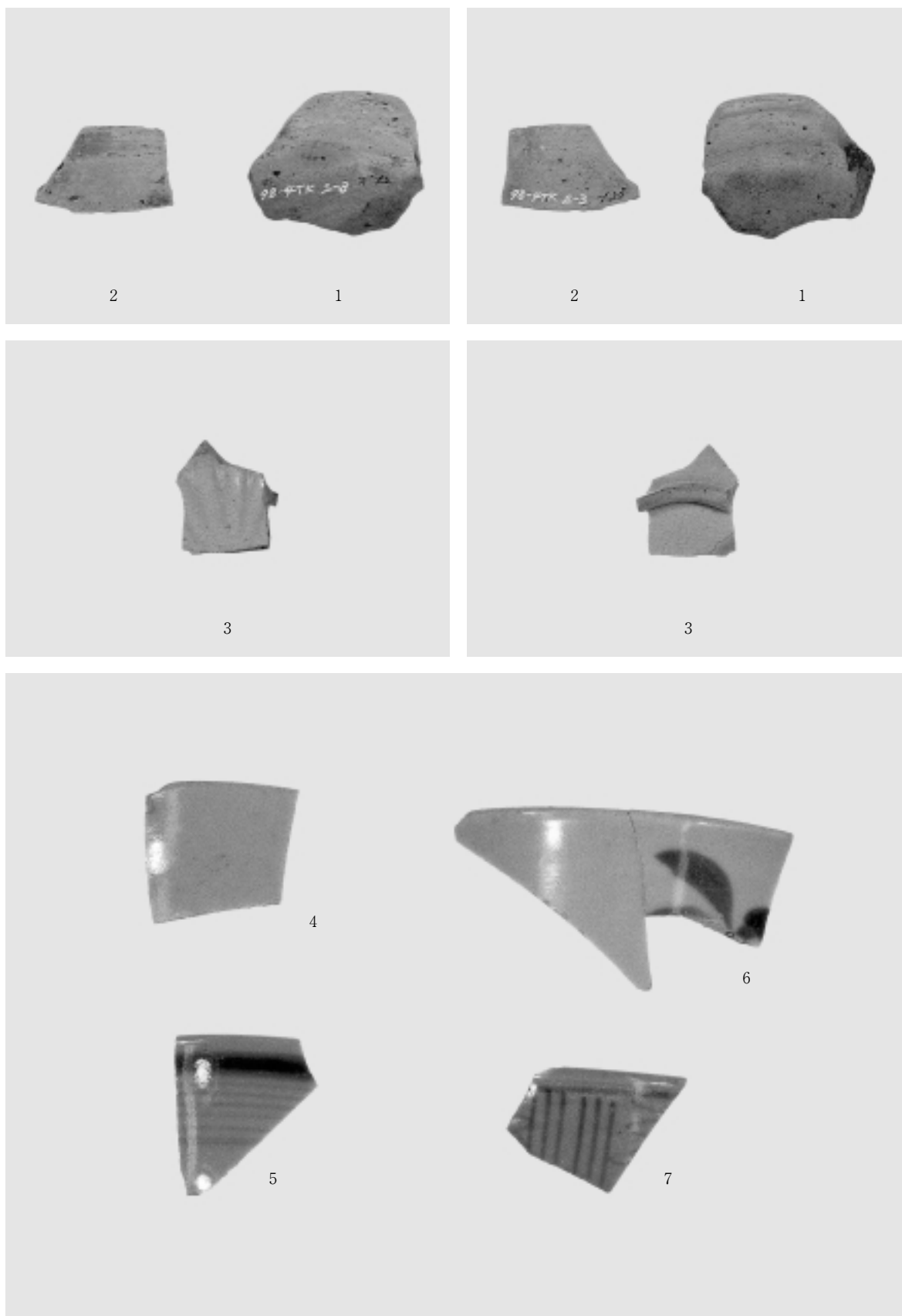
遺構完掘状況（N区・南西より）



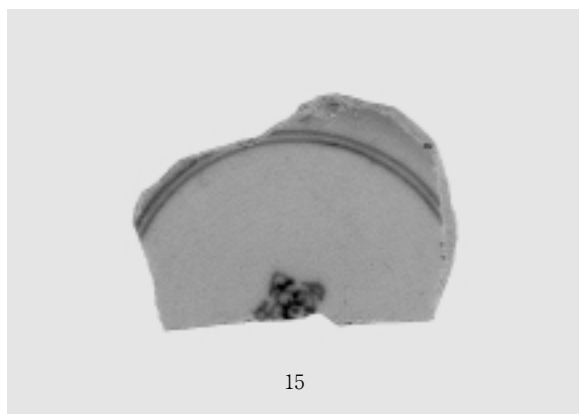
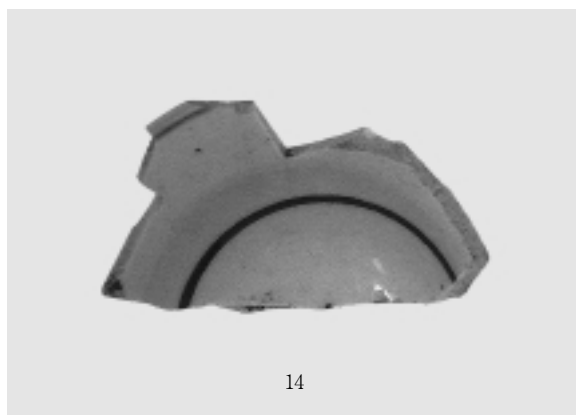
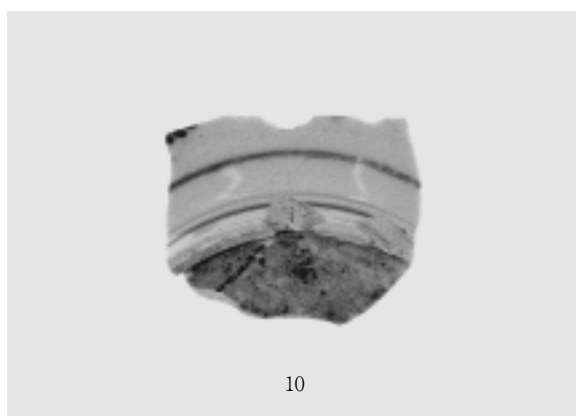
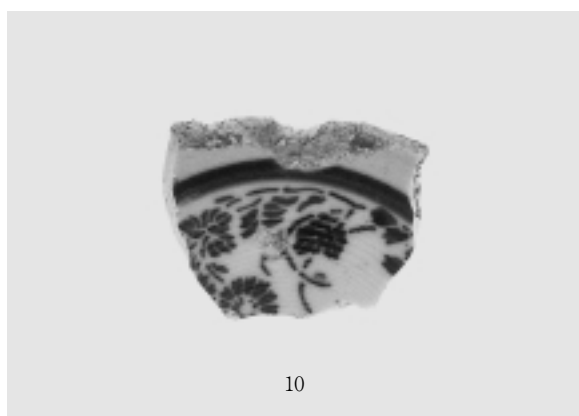
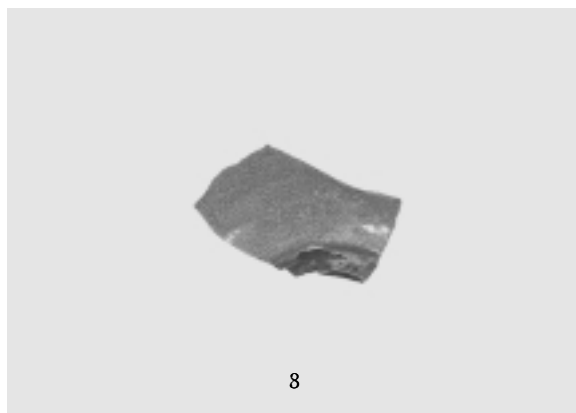
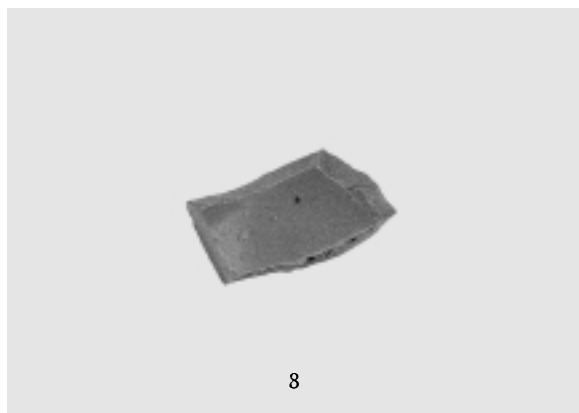
遺構完掘状況（N - 2区・N - 3区）(南より)



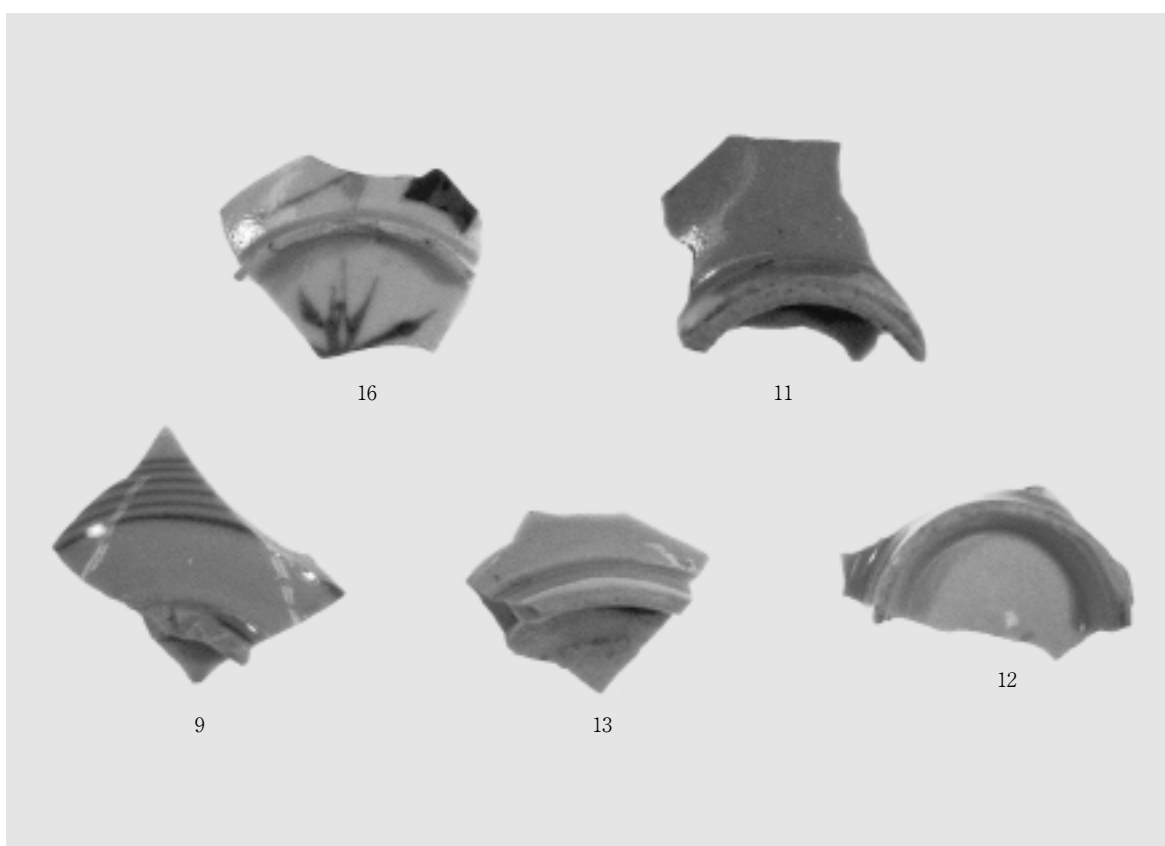
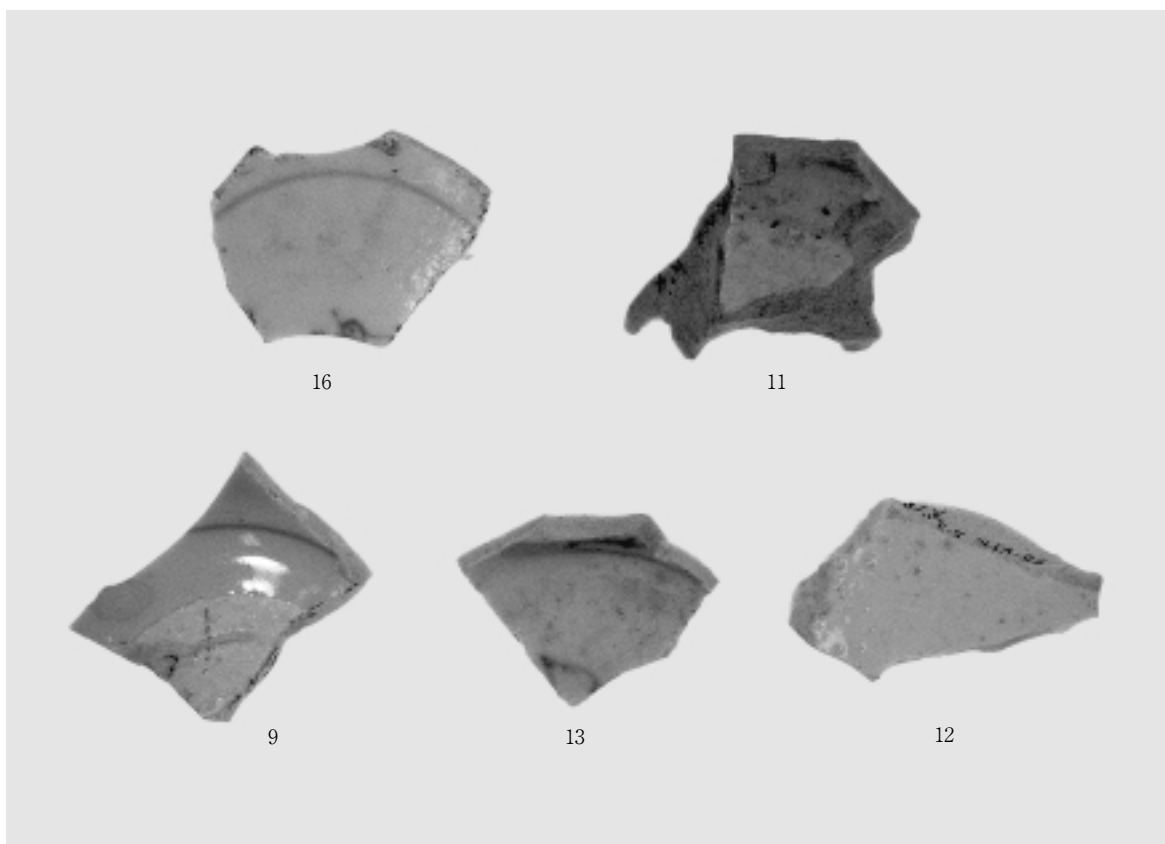
遺構完掘状況（南西より）



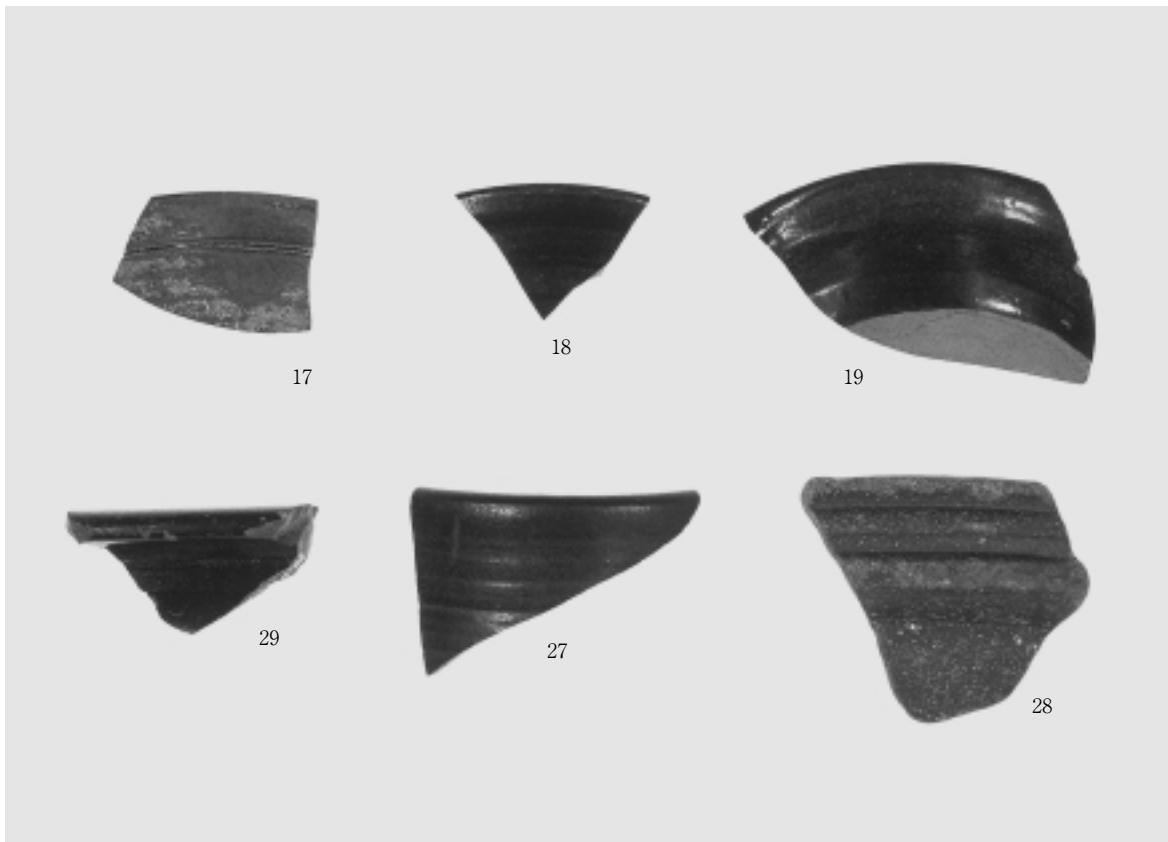
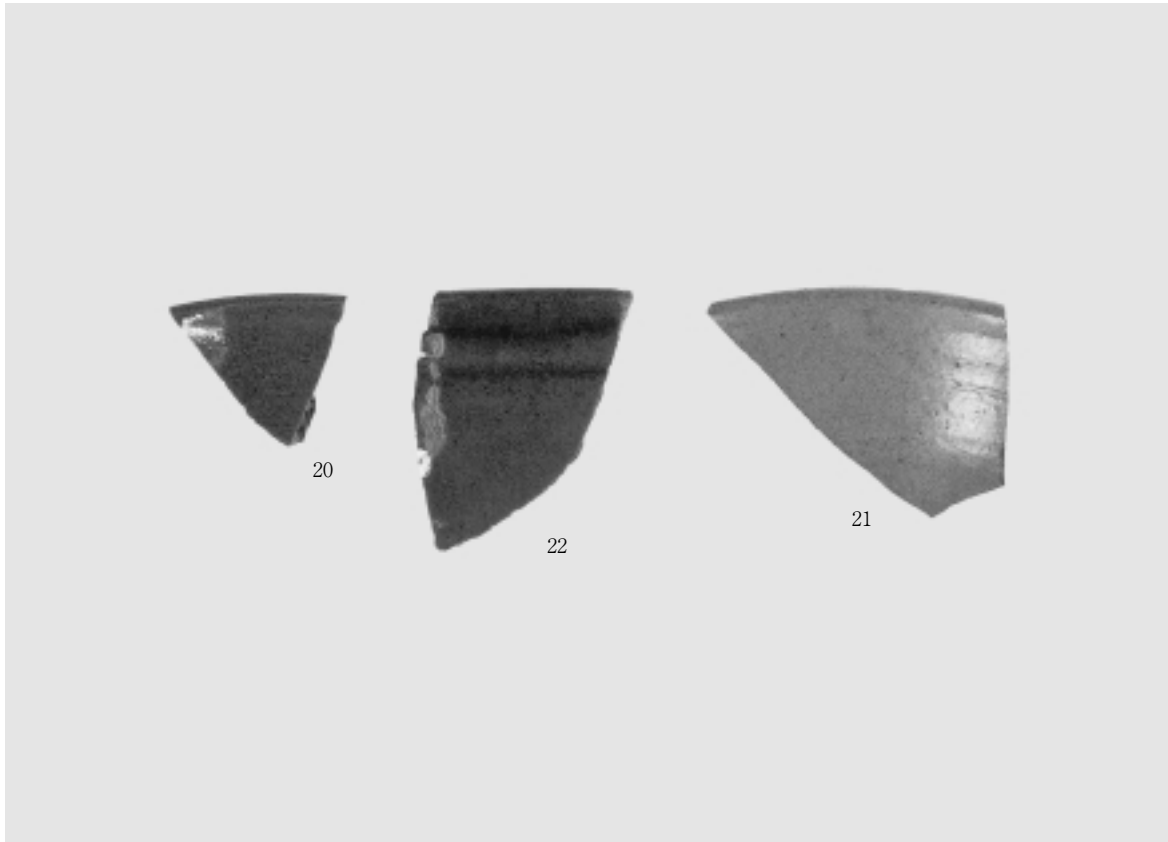
出土遺物 1 (土師器・磁器)



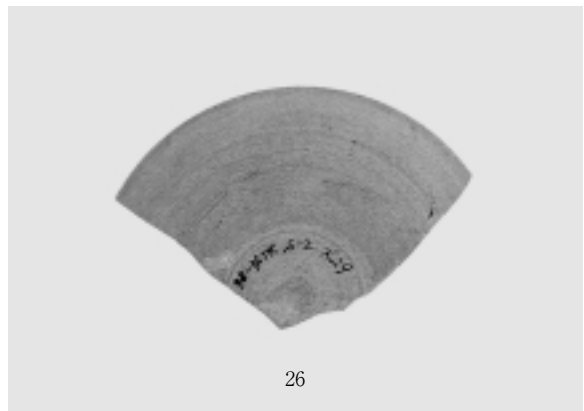
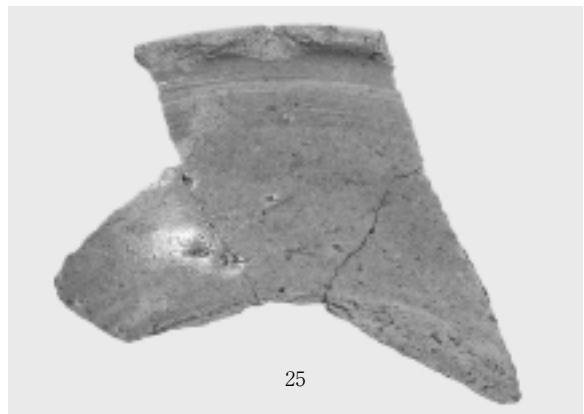
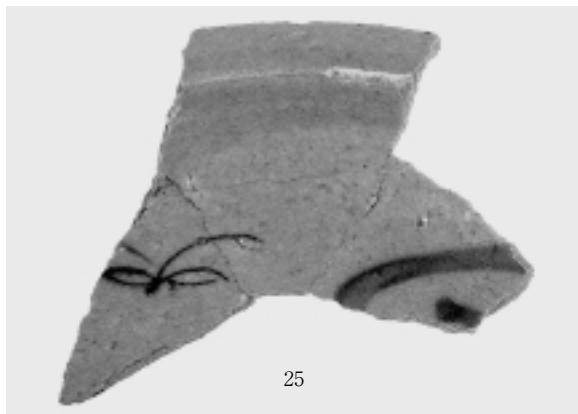
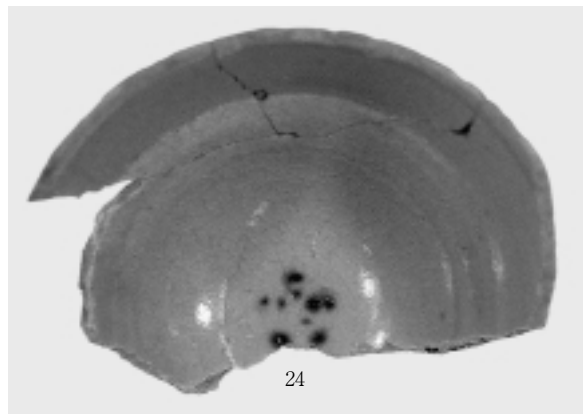
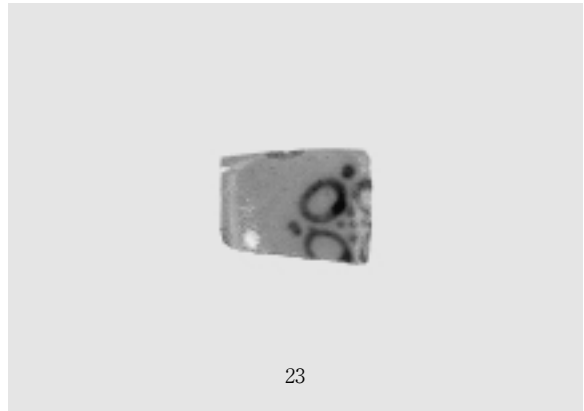
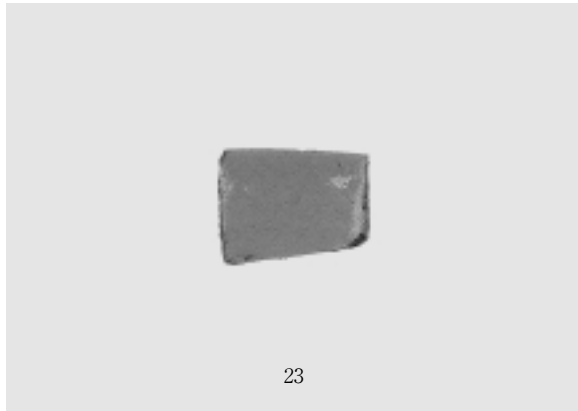
出土遺物 2 (磁器)



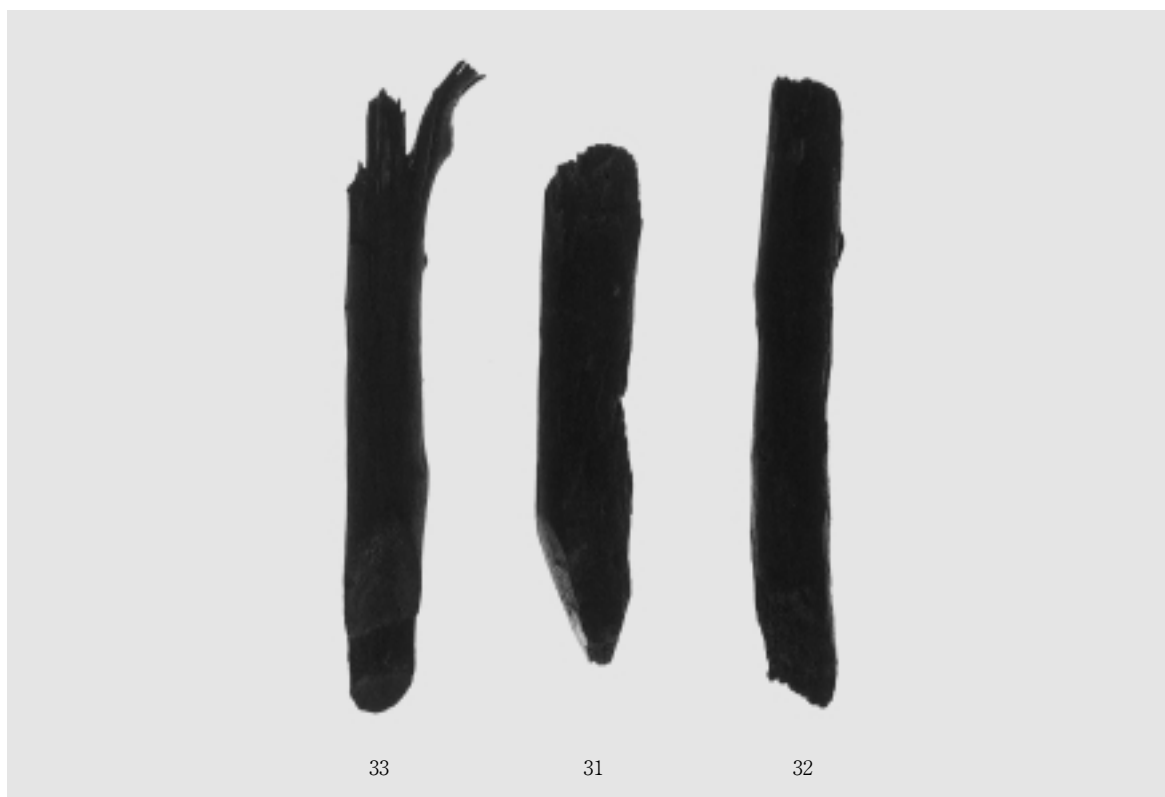
出土遺物 3 (磁器)



出土遺物 4 (陶器)



出土遺物 5 (陶器)



出土遺物 6 (石器・木杭)

報告書抄録

ふりがな	きたじありのきいせき							
書名	北地アリノ木遺跡							
副書名	四国横断自動車道（伊野～須崎）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第52集							
編著者名	江戸秀輝							
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	〒783 - 0006 高知県南国市篠原南泉1437 - 1 TEL(088 - 864 - 0671)							
発行年月日	2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 。	東経 。	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きたじありの 北地アリノ きいせき 木遺跡	こうちけんときし 高知県土佐市 きたじ 北地	39205	050086	33° 28 54	133° 22 53	試掘調査 平成9年 11月10日) 平成10年 1月9日 本調査 平成10年 5月18日) 9月16日	試掘調査 320m ² 本調査 1,000m ²	四国横断自 動車道（伊 野～須崎） 建設工事に 伴う事前の 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
北地アリノ 木遺跡	散布地	古代～ 近世	土坑、柱穴 溝状遺構、等		土師器 皿 杯 陶磁器 石器 木杭			

北地アリノ木遺跡

四国横断自動車道（伊野～須崎）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000年3月

発行 (財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原南泉1437 - 1
Tel. 088 - 864 - 0671

印刷 共和印刷株式会社